

TOTO

2011年 新春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信

今、建築家であること

特集

Special Feature / Seeking New Concepts in Architecture

設計の
手がかり

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 492
New Year 2011

Contents

特集/座談会 本質を問う実験が 始まっている 西沢立衛+藤本壮介+藤森照信	4
特集/インタビュー① 合理性の入り口は たくさんある 吉村靖孝「ドリフト」	14
特集/インタビュー② 10坪でも自然の要素は すべて揃う 保坂 猛「LOVE HOUSE」	20
特集/インタビュー③ すべてがうまきはまる 瞬間を待つ 原田真宏+原田麻魚「near house」	26
特集/インタビュー④ 理にかなう 形がある 峯田 建+恩田恵以「SPROUT」	32
特集/インタビュー⑤ 皮膜一枚が あって 河内一泰「KCH」	38
特集/インタビュー⑥ イメージが立ち上がるとき 言葉とルール 大西麻貴+百田有希	44
シリーズ	
旅のバスルーム 79 文 スケッチ/浦 一也 シラヤライン ヨーロッパ号(バルト海)	48
現代住宅併走 15 文/藤森照信 長谷川豪の「森のなかの住宅」	50
地域に生きる会社 52 山根木材	56
TOTOギャラリー 間が創立25周年を迎えました TOTOギャラリー 間25周年記念展 「GLOBAL ENDS—towards the beginning」	58
最新水まわり物語 25 東急キャピタルタワー	60
news file	65

今、
建築家であること

Fujimori Terunobu

手がかり

4～13ページの座談会
は、工学院大学の藤森研究室
で行った。写真は1階アトリウム
にて。左から藤本壮介さん、西沢
立衛さん、藤森照信さん(写真=山
内秀鬼)。

編集制作/中原大久保坂口編集室
デザイン/岡本一宣デザイン事務所
印刷/ゼネラルアサヒ

「TOTO通信」を
インターネットで
ご覧いただけます。 TOTO Web Site

www.toto.co.jp



Fujimoto Sosuke

Nishizawa Ryue

特集 / 設計の

Special Feature / Seeking New Concepts in Architecture

日本の建築が激しく変化している。ここまで新鮮な建築、新しい設計コンセプトを次々に提示している国は、世界を見渡しても見あたらないと言いつてもいいだろう。とはいえ最先端を走る建築家が何を手がかりに、何を目指しているのか。そこに共通性はあるのか。同時代に生きて、同時代の動きを分析・認識するのは難しいことを承知のうえで、新しい動きを追ってみる。

司会／建築史家、建築家

藤森照信



Fujimori Terunobu

何を基本原理として建築を設計していくのか。新しい次元を開くような建築がどのような発想から生まれるのか。建築家にとってそれぞれの「設計の手がかり」は、とても大切なはずだが、それを見つけるのは簡単ではないようだ。そこで特集の巻頭ページとして、「建築に対する考え方の違いはかなりありそうだけれど、独自の原理で建築の限界を押し広げている人たちによる座談会」を企画した。西沢立衛さん、藤本壮介さん。そして司会役は、建築史家として日頃から「すごく大事なことをやっている人は、自分のやっていることの大事さをわかっていない」と語る藤森照信さん。あちらこちらに広がったり一点に絞り込まれたりする3人の視線に、あらためて建築を考える手がかりを発見できるか。まとめ／大山直美 写真／山内秀鬼(ポートレート)

Special Feature / Seeking New Concepts in Architecture



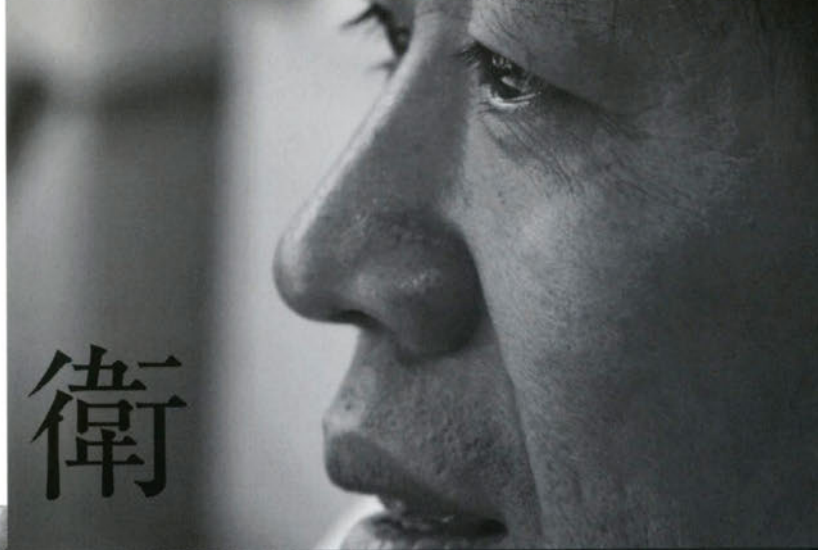
Round-Table

が始まっている

建築家

西沢立衛

Nishizawa Ryue



建築家

Fujimoto Sosuke

藤本壮介

創造の
手本のない
時代に

Nishizawa Ryue × Fujimoto Sosuke × Fujimori Terunobu

座談会

特集／設計の手がかり

本質を問う実験

「ホワイトキューブの問題から始めたい」

藤森

藤森照信(司会) おふたりがつくっているような新しい次元の空間は、どういう発想で、何を手がかりに生まれるのか。それを探るのが今日のテーマです。それで、藤森さんとは何度か話しているけれど、西沢さんとちゃんと話すのは初めてなので、この機会にまず聞きたいと思ったのが、ホワイトキューブの問題です。

ホワイトキューブ、つまり「白い立方体の箱に大きなガラス窓がついた建築」——これについてつらつら考えてみると、1930年前後にバウハウスが到達し、コルビュジエ (Le Corbusier / 1887~1965) もそれに続き、ミース (Ludwig Mies van der Rohe / 1886~1969) もやや重なっている。ホワイトキューブは20世紀建築のひとつの到達点であり、その後の原点ゼロに位置するわけです。日本でも戦前、バウハウスの影響を直接受けた山田守さんや土浦亀城さんはホワイトキューブをつくるけれど、意外とその後はあまりない。というのも、戦後はコルビュジエの打放しコンクリートとかピロティとかの強い造形の影響が圧倒的に出てしまった。応、谷口吉生さんと横文彦さんはホワイトキューブの基本的な体質をもっていたので途絶えはしなかったけれど、あのふたりも白くはしなかったんです。

最近、ミースの数少ないホワイトキューブとして知られる「トゥーゲントハット邸」(1930)の改修が始まって壁をはがしたら、じつは以前の壁はクリーム色だったことがわかった。だから、ほんとはホワイトキューブをやったのはバウハウス、グロピウス (Walter Gropius / 1883~1969) で、ミースはそうでもなかったんです。むしろやったのはコルビュジエだけれど、それも「スイス学生会館」(1932)以後はやってない。こうしてみると、ずっと続いていると思っていたホワイトキューブの流れは、い

西沢立衛

にしざわりゅうえ

1966年東京都生まれ。88年横浜国立大学工学部建築学科卒業。90年同大学院修士課程修了。90年妹島和世建築設計事務所入所。95年妹島和世とSANAA設立。97年西沢立衛建築設計事務所設立。現在、横浜国立大学大学院准教授。2010年ブリツカー賞受賞。西沢立衛建築設計事務所としてのおもな作品=「ウィークエンドハウス」(98)、「鎌倉の住宅」(01)、「船橋アパートメント」(04)、「森山邸」(05)、「HOUSE A」(06)、「十和田市現代美術館」(08)、「豊島美術館」(10)。

つたん世界的に消えていたわけです。

ところが、それをSANAAの妹島和世・西沢立衛コンビがくり出すんですね。普通、ホワイトキューブといっても横長だったりするんですけど、ほんとの真つ白なキューブで、あんなの、世界にありませんよ(笑)。

西沢立衛 ホワイトキューブということは、じつは今まであまり考えたことはなかったんです。美術の展示空間のことをホワイトキューブと言ったりするけれど、建築用語としてはあまり一般的ではなかったし。

「なぜ白く塗るのか」

藤森

藤森 いつ頃から白い箱に関心をもったのですか。

西沢 「金沢21世紀美術館」(2004/*1)は、いわゆるホワイトキューブですね。でも、ホワイトキューブについて具体的に関心をもったことはなかったし、今もとくに関心があるわけではないんです。

藤森 それはとてもおもしろいことですね。

西沢 90年代後半、設計の中心にプログラムがあった時期があって、妹島さんと議論しながらどんな考えていくうちに、壁にしても何にしても厚みがなく、存在がなくて関係性だけがあるようなものになっていったと思うんです。その頃の活動はある意味でホワイトキューブ的なものだったかもしれないね。ただ、プログラムというところでも、建築の中をどう並べるかという問題になっていくので、あの時期につくったものはよくも悪くも閉じていて、今は僕としてはちょっと批判的に見えています。

藤森 中に自閉する？

西沢 そうです。本当はプログラムというの人間がどう使うかということだから、中か外かは関係ないんですが、当時はすごく内向的になった時代でしたね。藤森 ちよつとホワイトキューブから離

*1

金沢21世紀美術館

設計/妹島和世+西沢立衛 / SANAA



石川県金沢市。美術館と市民のための交流施設が、直径113mの円形の建物の中に組み込まれている(写真//SANAA)。

*2

森山邸

設計/西沢立衛



れてしまいますが、その「プログラム」というのはいつ頃から言い出しましたか。僕らの頃は「プラン」と言っただけ、その前は「間取り」で、伊東豊雄さんに言わせると、僕がつくる建築は、間取り。正確には「伊東さんのお父さんが炬燵に入りながら描いていた程度の間取り」だということだけだ(笑)。

西沢 それはやはりレム・コールハース (Rem Koolhaas / 1944) の「ラ・ヴィレット公園コンペ案(2等) (82)」だと思いますね。1等のベルナル・チュミ (Bernard Tschumi / 1944) も、デイスプログラムとか言っていました。ちよつと文学的で、僕はあまりおもしろいとは思わなかった。でもレムのやり方はすごいと思いました。全部を計算で決めていく、まるでマシンのようで、野蛮というかなんというか。

藤森 そのへんからプランではなくプログラムと言うようになったんだ。今の学生は、この部屋の隣にこの部屋があつてという普通のプランのことを「プログラム」って言うから、びっくりする(笑)。

西沢 確かに、プログラム＝プランみたいな誤解は、あるのかもしれない。90年代に僕らがやったことで極端だったと今思うのは、プログラムと平面をつなげてしまったというのはあるかもしれない。

藤森 それで、ホワイトキューブはプログラムを考えるなかで、だんだんああいう形に収束していったということですか。

西沢 これは僕らの癖みたいなものかもしれないけれど、どんどんよけいなものをはずして単純にしてしまおうというところがあつて、プランニングも、そういう面があると思います。一種の形式化、抽象化だと思ふんですが、「森山邸」(05 / 「OTTO通信」2006年夏号「原・現代住宅再見」※2) の場合も、ホワイトキューブというよりはむしろ本当はジャッド (Donald Judd / 1928-1994) みたいに素材だけでつくりたかつたんです。でも、予算とか防錆とか、現実的な問題で白く塗らざるをえな

実際に建築をつくると、中と外を超えた形で環境が生まれてきます。



Nishizawa Ryue

「今は『関係性』と『環境』に興味がある」

西沢

山さんの前で切腹しておわびするしかないなと思って(笑)、まあ心配だったので。それで、明るさに助けを求めて白くした。あれはけっこう、自分の心の余裕のなごの表れという部分ですよね。

藤森 僕がその白の問題に興味があつたのは、藤本さんもそうなんです。君たちが実験を始めているんじゃないかと思うからです。建築には、高さとか横の広がりとか、壁とか窓とか入り口とか、内と外とか、基本的な性格というものがあつて、それについての実験をみんなが始めている。

で、実験をするときにはなるべく夾雑物がないほうがデータが乱れなくていいから、それで白くするんじゃないかと。そういう側面はあります。

藤森 鉄板構造は石山修武が始めて、伊東豊雄が続いた。コンクリートや煉瓦では壁の厚みでちゃんとしたキューブにはならないから、「森山邸」のような鉄板とガラスというのはキューブのひとつの究極でしょうね。それはいいんだけど、僕が聞きたいのは、なんで白く塗るのかってことです。

西沢 白く塗らなかつたわけではないんです。「森山邸」は、とにかく建物全体をばらばらにして、隙間空間をいっぱいつくるといふ案だったから、当時は自信がなかつたのです。

あの地域は住宅密集地で、いろんな隙間が町じゅうにあつて、いい隙間もたまにはあるけれど、よくない隙間もいっぱいあるんです。そういう悪い隙間がいついある街で、隙間だらけの建築を提案して、できた隙間が全部まわりと同じ悪い隙間ばかりだったら、これはもう森



東京都内の集合住宅。オーナー住居、オーナーの友人の住居、賃貸住居が、計10棟の建物群によって構成されている(写真4点「西沢立衛建築設計事務所」)。

西沢 実験というのはまさにそのとおりで、むしろそういう意味で、僕は白く塗りたくなかったのです。白く塗ってしまうとそれが目立ってしまったって、それがテーマに見えてしまい、自分たちの実験の中心がかすんでしまうから、白はあまりやりたくなかったのです。本当は素材だけで組み立てたい。コンクリート造ならコンクリートのまま、鉄骨なら銀色のままというのが理想ですが、現実にはなかなか難しいですね。

藤森 たとえば、内と外のあいだには何かあるかとか、いろいろな実験のテーマがあると思うけれど、西沢さんは今どういう実験に興味がありますか。

西沢 人間が今まで経験してこなかった空間や建築をつくりたいのですが、やはり僕は空間の関係性がテーマのひとつになっていると思います。新しい関係性というものは、建築だと非常に明快に、わかりやすく示すことができると思うのです。

環境にも興味があります。建築をつくる環境ができる。壁で囲われた建築だとしても住環境は室内にできるものととらえがちですが、実際に建築をつくと、中と外を超えた形で環境が生まれてきます。建築は敷地内に納まっているけれども、建物ができることでまわりの風景も変わるし、中と外にいる人が体験する空間も、敷地を超えた大きさがあると思うんです。そういう環境、壁で囲ってできる空間というものと違う空間の存在をイメージしているのかなと思います。

「外観は、中と外で起こっている関係が表れるもの」—— 藤本

藤森 外観という問題に対しては、どう考えてますか。

西沢 外観は……藤本さん、そろそろ何か言ってくださいよ(笑)。藤本さんは、まさに「外観がない」というのを目指していますよね。

藤本壮介 僕は藤本さんに初めて会って、

藤本壮介

ふじもと そうすけ

1971年北海道生まれ。94年東京大学工学部建築学科卒業。2000年藤本壮介建築設計事務所設立。現在、東京大学特任准教授、慶応義塾大学 東京理科大学非常勤講師。おもな作品＝「伊達の援護寮」(03)、「T house」(05)、「House O」(07)、「house N」(08)、「House H」(09)、「Tokyo Apartment」(10)、「武蔵野美術大学美術館 図書館」(10)。

「T house」(05)／「TOTTO通信」2006年春号「原・現代住宅再見」／*3)を見てもらったときに、あれはけっこう室内にフォーカスして、中に関係性をつくらうとしていたことあったのですが、「外観がないね」と言われて、ちょっとくやしいなと思った(笑)。

藤森 でも、ないよ、あれは(笑)。

藤本 外観というのは何かと考えると、結局、中と外で起こっていることとの関係がそのまま表れるものなんじゃないかと思いません。だから、そういうふうには建物をつくれれば自然と外観もできてくるのではないかと。先日、藤森さんに見ていただいた「house N」(08)／「TOTTO通信」2009年夏号「現代住宅併走」／*4)も、相当大きい外観ですが、外観のように見せかけて、じつはあいだがスカスカで空が見えたりしている。

西沢 藤本さんの場合は、建築の成り立ちそのものが室内体験にもなるし外観にもなる、というふうなことを目指しているんじゃないですか。

藤本 そうですね、両方をつくる仕組みみたいなことを考えていますね。

藤森 ただ「人間にはなぜ顔があるか」という大問題があるんですよ。それは簡単に言うと、ひと目でわからせるため。それと、顔にはその人の内面が表れるんです。そもそも、顔は基本的に正面から見られるようにつくられていて、それは生物学的な人間の欲求なんです。だけど、プログラムから考えるようなつくり方をしていくと、どうやって顔ができるのかという問題が起こる。

藤本 たぶん、顔がいくつもあるようにしたいんじゃないかと思えますね。外観はひとつではなく、中で起こっていることの豊かさが表れているようなものになりたい。

でも、その方で、わかりやすい外観であってほしいという思いもあります。単に中でいろいろ起こっているから顔がたくさんあるというよりは、ひと目見たときに、中で起こっている豊かさを感じ

*3 T house

設計／藤本壮介



4人家族のための平屋の住宅。厚さ12mmの構造用合板で仕切られた放射状のワンルーム(外観写真：藤本壮介建築設計事務所、室内写真：阿野太一)。

させるような顔の集合体にしたいたいなど。

「隙間は日本の街の原理」

藤森

藤森 藤本さんは以前、木立の中から外を見たときの独特の景色の味わいについて話していましたよね。それと、北海道から上京したときに見た東京のブロック塀と電信柱が似ていて好きだったという話。それを聞いてようやく、なるほどそういうことをねらっているのかとなんとなくわかった。確かにブロック塀と電信柱は「街の枝」みたいなもので、見えるような見えないような内と外の関係だからね。

藤本 そうですね。僕がそのとき言った木というのは、生まれ育った地元にある、森というよりはたいして大きくない藪みたいなところなんです。東京の街と藪の藪に共通しているのは、ある程度閉じているんだけど、どこまでも行けてしまう。守られた感じと広がった感じが融合した状態というんでしょうか。それがすごく快適だと思った。しかも、自分で好き勝手に探索すれば、閉じた状態も開いた状態も選べられる。そういう幅のある場所がつくれたらいいなと考えています。

藤森 日本の街はヨーロッパみたいな城壁都市と違って、家と道のあいだに変な隙間がある。日本の超高層ビルなんかアメリカ人が見ると変な感じに見えるらしいよ、すごく間抜けに見えるんだって(笑)。なんでニューヨークの摩天楼みたいに密集してなくて、あいだに変な隙間があるんだと。住宅も民法に従うから、必ずあいだがあるし。

藤本 あの、ピシッと閉じられてない、不思議な抜け感が魅力です。藤森 僕は西沢さんの「森山邸」でも、それを感じましたけれどね。取材の最中に、近所のおばあさんが手押し車を押しながら棟



自分は骨格が見えるのがなんとなく嫌いなのではないかと思いはじめました。

Fujimoto Sosuke

と棟のあいだを横切っていったシーンには感動した(笑)。まわりにはいつさい目もくれず、他人の家の隙間を通っていくあのおばあさんこそ、「森山邸」のよき理解者ですよ。あれがじつは日本の街の原理であり、建築の原理でもあったんですね。

「情報量が増えると体験が豊かになると思う」

藤本

藤森 そういえば、西沢さんのお兄さん、西沢大良さんかなり不思議な人だよ(笑)。僕は藤本さんとも、緒にやった東京ガスの「SUMIKA Project」(08)のときに話をし、その後、諏訪の家も見ただけれど(「諏訪のハウス」99)

「TOTTO通信」2010年新春号「現代住宅併走」、彼はひたすら上からの光に興味があつて、壁には興味がない。このあいだ、その大良さんの弟子の長谷川豪さんがつくった家を見たら(「森のなかの住宅」50、55ページ参照)、彼は斜めに開いた天井裏から見る空にしか興味がない(笑)。彼らは、上とは何か、斜めとは何かという実験をしているんですよ。

藤本さんは最近、どんな実験に興味がありますか。植物の問題？
藤本 植物は最初に「house N」でちょっと植えて、「SUMIKA Project」でつくった「House before House」(*5)でもっといっぱい植えたんですけど、植物が出てくるのはたぶん中と外の問題に……。

藤森 重要な働きをする？
藤本 はい。「house N」では3層の箱のうち、番外の箱と中間の箱のあいだは外なので、応木ぐらい生えていないという程度でした。後は夏は日射を遮るとか。ただ植物を扱ってみてわかったのは、1本の樹木でも本当に多様なんですよ。「House

*4 house N

設計／藤本社



大分県大分市に立つ住宅。3重の入れ子による内外反転の形式と、庭と家をまとめて覆う大きな穴だらけの外殻というコンセプト(写真2点＝Iwan Baan)。

before House」では最初、個々の箱の素材や色を変えたほうがいいかなと思っていたんですが、木の多様さに比べて、色を変えるなんて……。

藤森 ござかしい？(笑)

藤本 多様でもなんでもないなと思って、結局、白くしたんですね。ちょっとあきらめた。で、最近では建築でつくる多様さについて考えています。

このあいだ「武蔵野美術大学美術館・図書館」(10/*6)が出来上がったときに、あの建物はプログラムが複雑だということもありますが、モノがもっている「情報量の奥行き」みたいなものをもっとつくると、ものすごく豊かな体験になるのではないかと気がしたんです。たとえば、本がぎっしり入った本棚がいっぱいあることによって、その向こうとこちらの空間では明るさも違って見えたりする。僕は「情報量」とか「解像度」という言葉を使っていますが、面として本棚を見たときに、つひとつのピースが見えてくる距離まで近づくと、情報の奥行きがガッツと増えてくる。つまり、中と外のあいだをつくりたいというのと基本的には同じですが、中と外だけだと0か1かという単純な単位だけれど、そのあいだにグラデーションをつくることで、それだけ情報量が、氣に増えて体験が豊かになってくる。そうすると非常におもしろいんじゃないかと思っています。

藤森 その「情報量」というのは基本的に、物質がもつ情報量ですか。

藤本 物質もありますし、素材とか、プランのつくり方、光、後は使われ方もそうですね。人が動くことで生まれる情報の変化というのは膨大なもので、そういうものをうまく複合すれば、おもしろいことが起こるんじゃないかという気がしています。

そういう意味では、白く塗るというのも多様性を生む効果があると思います。最初に白くしたのは、いっぱいキューブがある「情緒障害児短期治療施設 生活棟」(06/*7)ですが、あのときは明るさの問題が発端でした。外から入った光

藤森照信

ふじもり てるのぶ

建築史家。建築家。1946年長野県生まれ。71年東北大学工学部建築学科卒業。78年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。98~2010年東京大学生産技術研究所教授。2010年より工学院大学工学部建築学科教授。おもな著書=『明治の東京計画』(岩波書店)、『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房)、『藤森照信の原 現代住宅再見(1~3)』(TOTO出版)、『建築探偵、本を伐る』(品文社)。おもな建築作品=「神長官守矢史料館」(91)、「タンポポハウス」(95)、「赤瀬川原平邸(ニラハウス)」(97)、「熊本県立農業大学校学生寮」(00)。

がどう反射していくかを考えると、白以外の色だと相当気持ち悪いなと思っただけです。で、できると、白だと向きによって壁の色も明るさも変化するので、何かの色がつかっているという情報の情報より、より豊かになるような感じがしました。

「house N」も白くした主目的は明るさで、3重の箱だと白以外では内部が相当暗くなると思って白く塗ったんですが、その方、真ん中の箱の屋根に映り込んだ光が反射したりすることによって、単なる明るさのグラデーションを超えた何かが起こるんじゃないかということも考えました。実際にできると、外の天気によってどの層の箱が明るくなるかがずいぶん変わるの、空間全体の奥行き感も変わったりして、すごくおもしろいです。白にすることで何かが増えるというか……。

藤森 ああ、そう。白は実験でよけいな夾雑物を出さないためかと思っただけです。

藤本 確かに、あのときは箱・箱・箱というのがきれいに見えたほうがいいかなという思いも半分ぐらいはありましたが、今はだんだん、白のほうがより反転が起りやすいから情報量が増えて、体験が豊かになるんじゃないかということも考えていますね。

「構造を

どうするかで

相当のことが

決まってしまう」

— 西沢

藤森 さつき西沢さんが素材だけで組み立てたいという話をしましたが、それをもう少し話してくれませんか。

西沢 これは妹島さんの影響ですが、僕はストラクチャーというものを重視しています。建築というのは、構造をどうするかで、相当のことが決まってしまうと思うのです。なので、構造は一番重要な問題のひとつですね。それから、関係性というか、モノの成り立ちにある明快さがある、ということも重視していると思

*5 House before House

設計/藤本 社介



東京ガスの「SUMIKA Project」で建てられた4人の建築家による4軒の住処のひとつ(写真:阿野太一)。

*6 武蔵野美術大学 美術館・図書館

設計/藤本 社介



厚さ約900mmの書架の壁による渦巻き状の構成をもつ空間。鉄骨造、地下1階地上2階建て(写真:阿野太一)。

います。

「ディオール表参道」(03/*8)をやっていたときに、フランスのディオールの人々との考え方のギャップがすごくあったんです。彼らはいろんなものを隠して、バシッとかつこよく納めていくんですが、僕らは逆に、醜かろうがなんだろうが、全部露出していく、というか、関係性が重要で、いろんな関係を隠すのが嫌なんですよ。たとえば、カーテンウォールを留めるアングルを出そうとすると、クリスチャン・ディオールの店でそんなことやらんじやないと怒られる。でもわれわれとしては、なんでも石膏ボードで隠してしまう張りぼて建築みたいなもののはつくりたくなくて、シンプルな関係をつくりたいというのがあって。構造とか関係性とかいうのは建築の雰囲気を決めるので、重視していますね。

藤森 そんなに骨格を感じさせる建築をつくっている印象はないけど。まあ、

鉄板構造は構造がそのまま形になるからだろうけれど。

西沢 いや、そんなことはないと思いますよ。今までつくってきた多くの建物は構造にほとんどお金を使っています。仕上げをべたべた張るといのはまずやらない。よく透明だといわれるのも、構造の問題が大きいと思います。やはり壁構造にしたら四方八方に広がるものはつくれないし、ラーメン構造を選んだら、空間はどうしてもラーメンぽいものになってしまう。

藤森 今取り組んでいる構造の形式にはどんなものがありますか。西沢 「豊島美術館」(10/*9)というのをつくりましたが、それはコンクリートのシェル構造です。それから、ロンドンでつくった「サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2009」(09/*10)という仮設のパビリオンでは、細い柱を林立させて屋根を支えるフラットスラブ的なものを鉄骨でやりました。空間と構造がダイレクトにつながったものです。僕らは結構、すごくモダンなことをしているんですね(笑)。

藤森 確かに、形状としてのホワイトキューブも、構造をそのま



欠落と過剰の時期を経て、次の新しいものが生まれてくるんです。

Fujimori Terunobu

ます。

「柱よりはまた壁のほうが好き」

藤本

藤本 そこらへんが僕が西沢さんと 番違うところですね。僕は最近、自分は骨格が見えるのがなんとなく嫌いなのではないかと思いはじめたんです(笑)。たとえば、僕の建物はほとんど柱が見えていないんですね。武蔵美の図書館も大空間だから、ほうっておけば柱が出てくるので、それが嫌で壁をぐるぐるまわしているんです。

西沢 そうですね。

藤森 藤本さんは「次世代モクバン」(final wooden house・08/*11)とか、木造をけっこうやっていますよね。藤本 「次世代モクバン」はストラクチャーがそのまま見えている

*7 情緒障害児 短期治療施設 生活棟

設計／藤本杜介



6 3m角の白いキューブ 24個で構成された建物。キューブのあいだが2層吹抜けの室内空間(写真＝阿野太一)。

*8 デイオール表参道

設計／妹島和世＋西沢立衛 / SANA A



東京 表参道に立つブティック。ドレープを描くアクリルと透明ガラスを重ねた外観(写真＝SANA A)。

という形ですが、じつはあれは木片を積んだ後、ロッドで締め付けて、ありえないところでキャンチレバーで出っ張っている木があったりするので、ある意味ではビュアな構造ではないんです。

西沢 木を吊っているところもありましたね。

藤本 あれをやって、今の話をいろいろ聞いて、なんとなくわかってきたのは、僕は構造材が何かを支えているという感じが出るのが嫌なのかもしれません。空間を支えているのか、それ自体が迫り出しているのか、よくわからないのが好きなのかなと。

藤森 骨が嫌なんです。

藤本 そうですね。柱よりはまだ壁が好きなんです。それは、柱はいかにも支えている感じだけれど、壁はそれ自体がかなり場をつくるから、建築に参加している感が出るので(笑)。もちろん、柱も場をつくるんですが、支える支えられる関係ではなく、全体が生成している感じが好きなんだと気づきました。

だから、在来工法はけっこう好きですね。柱は壁の中に入っで見えないけれど、場の骨格は決めるじゃないですか。しかも、ブレースなんかが入っていると、ああ、なんか場をつくっているなという感じがして。

藤森 あ、ブレースは好きなんです。

僕はブレースだけは嫌でね(笑)。逆に、柱の象徴性は僕にとってはものすごく大事なもので、柱は天に向かって立つものだという意識がある。

西沢 掘っ立て柱みたいな感じですか。

藤森 そうそう、僕の変な趣味(笑)。いや、僕は人間の趣味だと思っっているんだけれど(笑)、古い人類の。

西沢 藤本さんが言う、支える支えられる関係はよくないというのはすごくよくわかりますね。

藤本 もちろん、大きな屋根が載っているから、何かを支えているにちがいないというのはいやがらないんですが、支える部材として見えてくるのではなく、その場をつくるものたちだけでその空間ができていてほしいという感覚なんです。そこにジレンマがあることは自覚しています。



人間が今まで
経験してこなかった
空間や建築を
つくりたい。

Nishizawa Ryue



僕らがやっていることも
100年後には
一般の住宅にも
反映されている
かもしれない。

Fujimoto Sosuke



以前、フランク・ゲーリー(Frank Gehry/1929-)の建物を見たとき、自分では絶対やらないと思いますが、こっちは煉瓦張り、そっちは銅板張り、あっちはブルーにペイントされているというような空間があって、そこにある種のジャンクルのような豊かさを感じたんです。そのとき、支えているとか支えていないに關係なく、場をつくっているものたちの集合体として、自分は建築をとらえているのかと思いましたね。

「歴史家として、こんなに
おもしろい時代はない」

藤森

西沢 欧米の建築家を見ていて、これはかなわないと思うのは、レムもゲーリーもジャン・ヌーヴェル(Jean Nouvel/1945-)もそうだけれど、増築的というか全体像なしでどんどん足してつくっていく感じがするんですね。足し算的というのか、あのダイナミズムは僕らには決してできないと思います。僕なんか逆にどんどん削ってシンプルにしていってしまうから。

藤森 それはやはりガウディ(Antoni Gaudí/1852-1926)を生んだり、石の造形が基本の土壌だから、そのトレーニングの差、彫刻の伝統ですよね。日本は日光東照宮程度しかないけれど(笑)、向こうはひたすらそれをやってきたから、われわれは彫塑的な能力はやはり欠けていると思いますよ。

西沢 それで建築に向かうわけだから、相当無謀でしょうか(笑)。

藤森 無謀だけど、逆にそれが向こうから見ると、なんであんな不思議な透明性のあるものができるのかということになるわけです。

西沢 ヨーロッパの人たちは、僕らのことがよくわからないというのはあると思いますね。「感覚的だ」みたいなことは、よく言われます。

藤森 感覚だと言われるのは、言葉が追

*9 豊島美術館

設計/西沢立衛



写真は模型を俯瞰したもの。コンクリートのシェル構造の建物(写真=西沢立衛建築設計事務所)。

*10 サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2009

設計/妹島和世+西沢立衛/SANA



構造用合板を鏡面磨仕上げのアルミ板で挟んだ屋根が、細い柱だけで支えられる(写真=Iwan Baran)。

いついていないだけです。言葉の先を行くのはものすごく大事なことです。

それに、現代の世界で、土地の上に独立した、個の建物をつくれるなんて日本ぐらいで、今あなたの方若手の実験を可能にしているのは日本の戸建て住宅ですかね。ともかく、施主がひとり納得してくればいいわけで、ひとりぐらいいますよ(笑)。森山邸だって、あれを最初にやる人は森山さんぐらいしかいない(笑)。

今、日本の建築家が世界の先端にいる理由のひとつは、建築の基本的な本質のつひとつについて、そういう実験が始まっていることにあるんです。上とは何か、斜めとは何か、壁とは何か、座るとは何か。木があるとは何か。中でメシを食うのと外でメシを食うのは何が違うか。そういう、本人も気づかずにやっているバラバラな実験が少しずつになると思う。

けれど、実験で困るのは普通の人にはわからないということですね。ノーベル賞をもらった人の話を聞いてもわからないのと同じで、ブリツカー賞をもらった人のことも、普通の人にはなかなか理解できない(笑)。でも、それはいずれかというところ、たとえば今のトイレとキッチンが20世紀建築がつくったもので、その前のトイレやキッチンは見えない舞台裏に全部隠すものだった。それをパウハウスが表に出してきたんです。

藤本 僕らがやっていることも、もしかしたら100年後には少しは一般の住宅にも反映されているかもしれない。藤森 そう。だから、人類のためにすごく大事な実験をやっているんですよ。ただ、実験というのは、はずれる場合のほうが多いです(笑)。アールヌーボーからパウハウスに行き着くまでの30年間も、教科書には成功例だけしか書かれないからほとんど知る人はいませんが、じつはさまざまな失敗があったんです。実



今あなたの方若手の
実験を可能にしているのは
日本の戸建て住宅
ですからね。

Fujimori Terunobu



験の時代には欠落と過剰が同時に起こって、わけがわからなくなるからね。

非常にわかりやすい例で言うと、コンクリートそのものの表現は何かという大テーマがあります。

世界で初めて打放しをやったのはオーギュスト・ペレ (Auguste Perret / 1874-1954) ですが(ル・ランシエの教会) 1923、その後、本野精吾が「コンクリートそのものが打放しではないのではないか」という疑問をもつんです。それはまったくそのとおりで、コンクリート打放しは型枠の表現なんです。そこで、本野はコンクリートを打った後、表面をびしゃんで叩いてはつるんです(「旧鶴巻邸」1929 / 「TOTO通信」2001年春号「原・現代住宅再見」)。だけど、原理的に考えすぎて、誰にも理解されないまま消えてしまった。ちなみに、ペレは最初に始めたけれど、お金ができてくるとすぐ上から大理石を張って

しま(笑)。本人が新しさに気づかないでやめてしまった。それから、世界で2番目に打放しをやったのはレーモンド (Antonin Raymond / 1888-1976 / 「レーモンド自邸」1924) で、コルビュジエ(「スイス学生会館」)より先にやっています。でも、自信がなくて途中でやめたりして、また再開している。

今はごくありふれた打放しコンクリートがモダンズムとして定着するまでも、それだけいろいろな紆余曲折があったんです。そういう欠落と過剰の時期を経て、次の新しいものが生まれてくるんです。ヨーロッパはそうした時代を、度味わった。今はいわば2度目の実験の時代で、創造の手法がない時代ですね。

僕は歴史家として初めて、そんなふうなわけがわからない豊かな時代を迎えたわけです。こんなに幸せなことはないし、見ていておもしろくてしかたがないですね。

*11 次世代モクバン Final wooden house

設計 / 藤本 社介



くまもとアートポリスのコンベによるバンガロー。350mmの角材を積み重ねてつくられた空間(写真:阿野太一)。

吉村靖孝

建物名

「ドリフト」

不動産マーケティングや流通の提案など、
建築設計のフィールドを広げて活動する吉村靖孝さん。
建築家として、自身の建築原理をどう考えているのか。

原点ともいえる2005年の住宅「ドリフト」の
コンセプトとともに語ってもらった。

まとめ／加藤 純 写真(ポートレート)／山内秀鬼
写真(建築)／小林浩志(P14~17)、新建築写真部(P18)

「 合理性の
入り口は
たくさんある 」

Yoshimura Yasutaka





早朝、濃い霧に包まれた「下リフト」北側全景。京都市街から車で1時間ほどの山間部に立つ。片流れ屋根面の形状が、この住宅のコンセプトを象徴している。

——今回の特集では、建築家のみなさんそれぞれの「設計の手がかり」を探りたいと思っています。吉村さんはどのように建築にアプローチしているのでしょうか。

吉村靖孝 自分自身が機能主義的といえますか、合理主義的な判断をする癖があるのは自分でもよくわかっています。ただ、何かひとつのテーマを掘り下げるよりも、パラメータの種類自体を増やしていきたいという気持ちがあります。現在のメインストリームとして、構造が合理的、環境のために合理的な建物とすることがあるように思います。でも、それ以外にもたくさんさんのテーマがあって、それらと掛け合わせると新しい建築が生まれるはずだと期待しています。

たとえば継続してかかっている「NOWHERE」というプロジェクトは、不動産と建築を掛け合わせたもので、「海辺のウィークリー別荘」を提供するものです。利用者と短期間の賃貸契約をすることで不動産の仕組みをチューニングし、建築とびたりと合うところを探しました。

また、最近「CCハウス展」という個展を行いました。CCは「クリエイティブ・コモンズ」の略です。音楽の分野などでは著作権管理が行き届いていますが、それを窮屈に思った人たちが、部は放棄することを明記して、リミックスやサンプリングを行えるように著作権を変えようとしています。コピーライトを守るか、コピーレフトと違ってすべてを放棄するか、その中間の著作権のあり方を指すも

のです。それを建築に利用したらどうなるかという考え方で、住宅に適用しようと思っています。どのようにリミックスして変更してもらってもかまわないという状態で、木造住宅の建築図面を配布・販売する。これは、建築と著作権、または建築とその買い方を掛け合わせようとするものです。

——うまくいきそうですか。

吉村 選択肢が増えること自体がおもしろいと感じています。住宅にはさまざまなデザインがあるのに、みな35年ローンを組むようでは暮らしが均質になるような気がして窮屈に思います。図面販売といっても、購入者がセルフビルドでつくることは想定していません。地方の工務店が商品力のある住宅を提供できない現状があるなかで、そうした方面にも訴える力があるだろうと考えています。

また、コンテナの規格に合わせて住宅のフレームを設計し、海外で製作して輸入するという計画も続いています。住宅の標準化や規格化に抵抗を覚える人もいます。しかし今の時代、1種類の物が世界中を埋めつくすことはありえないという前提で、服でいえばユニクロという選択肢があるかないかでは大きな違いがあります。すべてユニクロとすることがいいとは思いませんが、ユニクロがあること自体はいいことだと思います。建築でも同じようなことができればいいと考えています。高級車を買う程度の値段で住宅が手に入れば、そこで起こる暮らしは変化に富んだものになるのではないかという期待があります。

「ドリフト」 浅い奥行きを ずらして つなぐという 合理性

——「ドリフト」は2005年竣工ですが、ある意味で、吉村さんの原点的な建物ではないかと考えてお話をうかがいます。

吉村 当時は私以外に弟と妻の3人の協働で設計していたので、今も同じスタンスをとっているかという微妙なのですが、さまざまなプロジェクトのきっかけにはなっている住宅です。1300坪という敷地に建てるとしても大きな住宅だったので、真四角につくると中央のほうが暗くなりますから、奥行きを浅くした細長い形状としました。もうひとつの理由は、田舎での暮らしを選んだ建て主が、京都の山奥にある村の社会に突然入っていくことになりまますから、よそ者として扱われないために、室内のどこで何をしているかがあるべく外から見えるほうがよいだろうと。ただ、細長いことで生まれる強い方向性は山合いの農村の風景にそぐわない。それで、山道の蛇行に合わせて、もとからある小さな道や段差にすり寄るように折り畳むようにつくりました。建物のポリリウムはアクセスする道の延長です。1本道から入ってきて、右へ左へと行きながらだんだんと気積の小さな部屋に行き、最後は浴室に至ります。壁量が増えてコストが上がる欠点と、それによって得られる利点を検討した結果です。

音楽でいえば

通奏低音のようなものが鳴っていて、
そのうえでメロディが変わっていく
というイメージです。



西側前面道路からのアプローチ。左手北側には積雪が残っている。水平方向への展開を強調する外壁のリップはスギ板。



Interview with Yoshimura Yasutaka

写真下／ガレージからアプローチを見返す。この外壁だけは外光が入るスリット。



写真上／南側外観。東西に約45mの建物は、集落と建築の中間のような外観。地域の人々を巻き込んで使われることを目指したという。

地形などに対して微妙に反応できるようにと、木造のモジュールは910mmでなく600mmのグリッドにしています。今振り返ると気にしすぎたところがあり、うまくいっているところも、そうでないところもあります(笑)。大工は苦勞していましたし、屋根の鋼板葺きでも折り曲げのピッチが合わずに、立てハゼをつくる新たな機械を業者に購入してもらってつくるなどしました。

——部屋をずらしてつなげるというのは、設計当時はとくに新しいルールでしたね。

吉村 それぞれの部屋のあいだから界壁を取り去って廊下をなくし、開放しながらまとまりを維持するようにしました。どの部屋も用途はあまりはつきりとは決まっています。天井の高さやプロポーションに合わせて小梁の間隔や床の仕上げを変えたり、少しずつキャラクターや質が異なる部屋が並んでいます。部屋がずっと連続しているのでもなく、どちらの部屋ともとれるあいまいなものがつながっている感じですね。音楽でいえば通奏低音のようなものが鳴っていて、そのうえでメロディが変わっていくというイメージです。

ドリフト

DRIFT



写真上／2階リビング、ダイニング、キッチンを見通す。小梁が部屋ごとに直交する。左上／ホールから見返す。床仕上げも部屋で使い分けている。

外壁は横張りにしてリブを付けたのですが、やはり分節しながらひとつの建築に見えることを目指したものです。モダンな思考と、そうでない思考の両方から出てきたものだと思います。

——距離感の拡大など、視線の操作を強く感じます。

吉村 そうですね。ずれながら、何か所かは視線が通るようにしています。また、窓から建物を見返すところを設けるなど、視線は意識してつくっています。周辺に対してどれほど開けるか、閉じるかはどのケースでも重要で、場合によっては、閉塞感を解消するためにまわりの人を招くことに対応できるかということも考えます。「ドリフト」では、道路の延長で「いつのまにか室内」と感じられるように設計しましたが、近くで行われるお祭りのときには、地元の人に開放されているようです。

パラメータをどう選ぶか

——建て主の生活と合理性の関係はどのように考えていますか。

吉村 住宅でも、生活することとは違うところでの合理性を探したいと考えています。たとえば天然の洞窟は、雨、風など自然の合理性によってつくられたものですが、住んでも気持ちいいかもしれない。生活とは無関係な原理が全体を支配して形を決めた建物のほうが、よりよいということがあるはずですが、前提条件が変わると、その選択肢によって求められる合理性もまったく異なってきます。たとえば、トンネルの照明デザイン。以前は1種類のライトを並べるのが基本でしたが、最近では単調な光で事故が起きやすいというので、定区間ごとに色温度を変えるほうがメジャーになっています。どちらを合理的とみるか。メンテナンス面から考えるとすべて同レベルにするほうが合理的ですが、事故を減らすには変えたほうが合理的です。建築の設計でも、パラメータの選び方によって結果は異なります。合理的に考えるときへの入り口を、なるべく狭めないようにしたいと考えています。

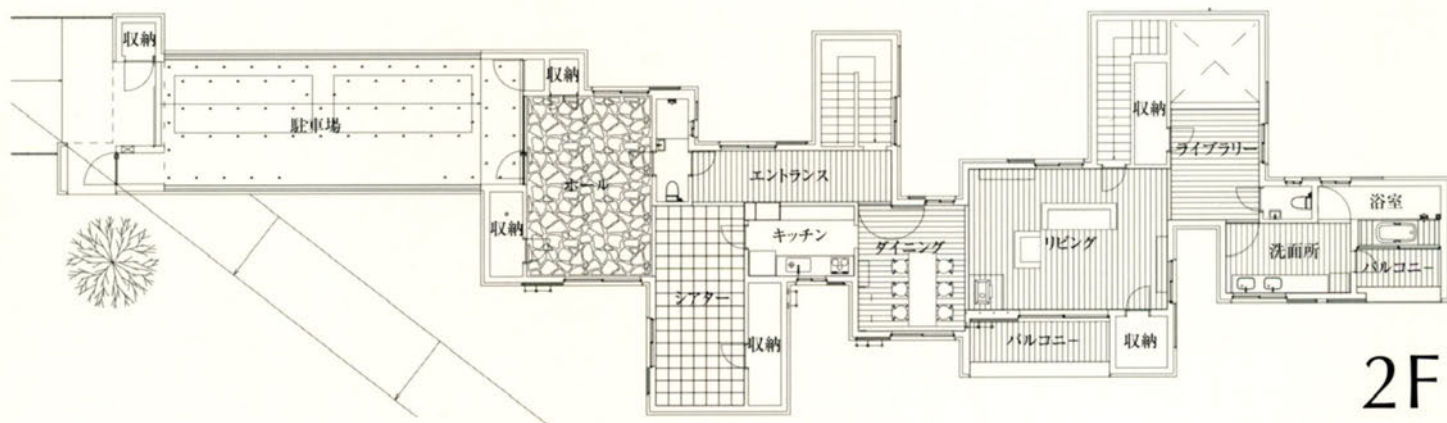
建築概要

所在地	京都府京都市左京区
主要用途	専用住宅
設計	SUPER-OS (吉村靖孝、吉村真代、吉村英孝)
構造	佐藤淳構造設計事務所
施工	田中光工務店
構造・規模	木造、一部鉄筋コンクリート造 地上2階建て
敷地面積	4,267.00㎡
建築面積	254.16㎡
延床面積	392.76㎡
設計期間	2003年7月～2004年6月
工事期間	2004年7月～2005年6月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板 t=0.35mm 立てハゼ葺き素地仕上げ
外壁	スギ板t=12mmリブ付き横羽目板張り 浸透性防腐塗料2回塗り
開口部	アルミサッシ、スチール建具、木製建具
おもな内部仕上げ	
2階居室、洗面脱衣室	
床	石英岩乱形張り、玄昌石400mm角、 無垢フローリング(チーク、ナラ、カバ) t=15mm(一部床暖房)
壁	PBt=12.5mmホタテ塗料 ローラー塗装仕上げ
天井	化粧野地 スギ構造用合板 t=12mmオイルステイン塗装 スギ現し梁 オイルステイン塗装
1階居室	
床	無垢フローリング(チーク、ナラ、カバ)
壁	腰上 PBt=12.5mmホタテ塗料 ローラー塗装仕上げ 腰下 RC打放しのうえモルタル補修 ホタテ塗料ローラー塗装仕上げ
天井	PBt=9.5+9.5mmホタテ塗料 ローラー塗装仕上げ
浴室	
床	丸モザイクタイルFRP防水、床暖房
壁	耐水合板t=9+9mmFRP防水現し仕上げ
天井	野地板、現し梁のうえ FRP防水現し仕上げ

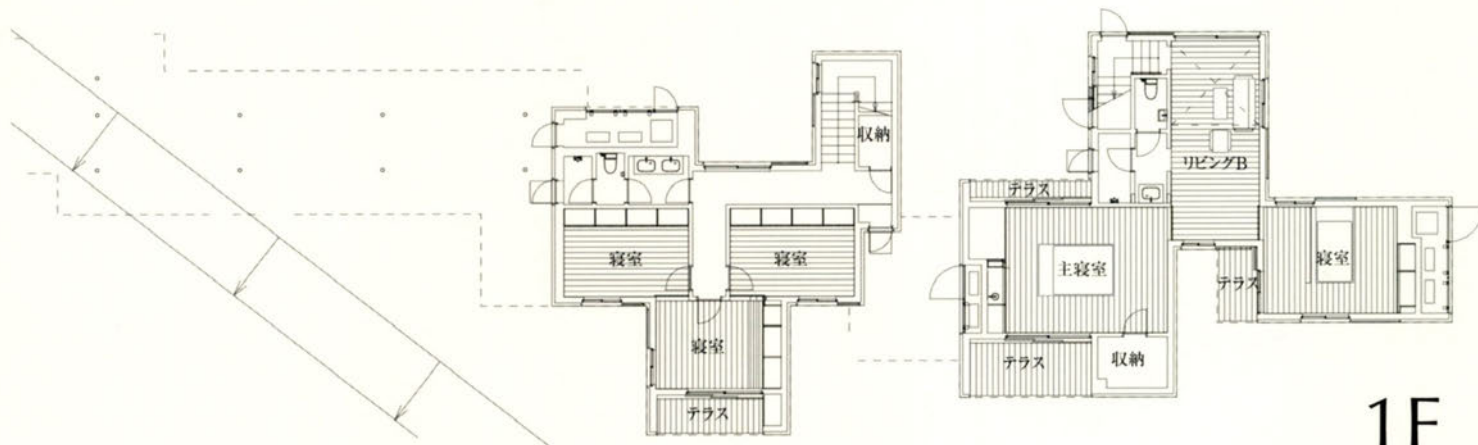
平面図

0 2 4m

1/250



2F

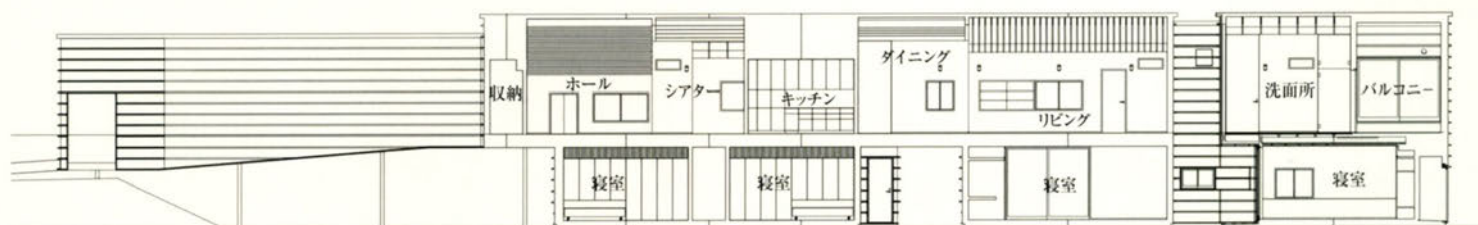


1F

断面図

0 2 4m

1/250



Interview with Yoshimura Yasutaka

よしむら やすたか / 1972年愛知県生まれ。95年早稲田大学理工学部建築学科卒業。97年同大学大学院修士課程修了。99、2001年文化庁派遣芸術家在外研修員としてMVRDVに在籍。01年SUPERIOSを共同設立。02年早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程満期退学。05年吉村靖孝建築設計事務所設立。現在、早稲田大学芸術学校、関東学院大学非常勤講師。おもな作品は「軒の家」(08)、「NOWHERE BUT HAYAMA」(09)、「NOWHERE BUT SAJIMA」(09)、「ベイサイドマリナーホテル横浜」(09)、「中川政七商店新社屋」(10)。

保坂 猛

建物名

「LOVE HOUSE」

保坂猛さんは2004年に個人事務所を立ち上げて以来、「建築の内と外」を重要な設計テーマとしている。それは原体験とも関係しているのかもしれないが、10坪の敷地での発見が決定的だったようだ。その自邸、「LOVE HOUSE」を訪ねた。

まとめ/加藤 純 写真/傍島利浩

「 10坪でも
自然の要素は
すべて揃う 」

Hosaka Takeshi





写真右ページ／北側
外観。扉を入れてす
ぐ左に1階の入り口
がある。階段部分は
屋根だけ架かっ
ている半屋外空間。左ペ
ージ／1階の寝室か
ら玄関方向を見る。
通路幅は限界ともい
える480mm。



写真上／2階南端から見る。よく見るとウサギが。中／1階の庭に面した浴槽(シャワースペース)と化粧スペース。洗面器はない。下／庭側から1階を見通す。

——この自邸「LOVE HOUSE」や以前に拝見した「屋内の家+屋外の家」(「OTTO通信」2010年新春号)のように、保坂さんは「建築の内と外」をひとつのテーマとされているそうですね。これには原体験のようなものが関係しているのでしょうか。保坂 祖父は農家で、子どもの頃、実家のまわりには田畑が広がっていました。敷地のなかに家がある、という環境ではなく、自然のなかにポツンと家があるような状況で過ごしていました。屋内と屋外はあまり意識せずに、移りゆく天候や季節、またそのときの気分によって遊び場所や遊び方を変えていました。

最近では屋内で完結する活動が多くなっています。が、もう一度屋内と屋外の関係性を見直すことで、私たちが取り巻く環境や人と自然の新しい関係を発見できるのではないかと思います。それで敷地の大小にかかわらず、建物単体の内部空間だけでなく、ていくよりも、屋内と屋外の両方があるような建物をつくりたいと考えています。共通するテーマとして「建築の内と外」をもってはいますが、そのつど答えの出し方は異なります。建物ごとに平面的に新しいもの、また建築として新しい部分をつくることでできればいいなと思っています。

「LOVE HOUSE」 建築の内と外の実践

——屋内でも屋外でもあるような空間の自邸では、それを建築としてどこまで縮小できるかを試みているのですか。

保坂 敷地のまわりには、北側の道路を除く三方にそれぞれ2階建ての住宅が立っていました。いかにも残余空間のようで、敷地に立っていてもいいイメージがわいてこないの、敷地からは離れて「あの土地に何があったのだろうか」と思い出すように計画していきました。その頃、たまたま聖書の創世記を読んでいて、神が天地を創造していった話がありました。1日ごとに光・空・地・海、植物、太陽・月・星、動物、人間、と整えていく記述です。そこで気づいたのは、わずか10坪の敷地にも地球上に与えられた自然の要素はほとんど揃っている、ということ。それらの要素をこれから設計する建物で豊かに出せるはずだ、ということから発想しました。ちなみに動物として今はウサギを飼っています。階段と庭のあいだの細い隙間は、小動物が通る道として計画しました。計画では、それぞれの要素をできる限り排除せず

に統合できないかと考えました。樹木や動物には、それぞれのスペースが必要です。方、敷地の面積は33・16㎡、建ぺい率60%で建築面積は18・96㎡。計画した住宅は、階段部分の庇を鉛直投影した面積で最大となっています。おのずと寸法はシビアになっていくのです。たとえば、1階玄関と寝室をつなぐ廊下の幅は480mmです。廊下の両側には収納をできる限りとり、開き方も工夫しています。洗面所もほしかったのですが、洗濯物を干す階段外側のラックと天秤に掛けることになり、洗面器はあきらめました。この自邸の設計で、住宅でのスケールの限界というものがわかったように思います。

——約5年間のここでの暮らしはどうでしょう。

保坂 私たち夫婦の一人暮らしなのですが、自分たちが建物に順応したようです。新たに物はあまり買わなくなりました。妻もこの家に来るときには40足の靴を所有していて、それらの靴はすべて収納できるように設計しましたが、今ではその棚にウサギのえさなどが入っています(笑)。妻は「玄関に入った瞬間に見える月の光がとてもきれいで、毎日帰ってくるのが楽しい」と言ってくれています。

2階のガラス引き戸は夜も冬も台風のときも開け放しです。ダイニングには、電気照明を付けていま



2階ダイニングからテラス方向を見る。階段の平面をトレースする屋根（庇）と外壁の隙間から、光、風、雨が入り込んでくる。木製ガラス引き戸が閉じられることはないそうだ。



Interview with Hosaka Takeshi



この自邸の設計で、住宅でのスケールの限界というものがわかったように思います。

写真下右/キッチン上部の屋上。周囲は住宅が密集する。



写真上中/1階の庭からの見上げ。階段、テラス、ダイニングと一体の空間となっている。上左/キッチン。天窓は開閉可能で、屋上へは梯子をかけて上がる。

せん。とても小さな家なので、天井埋め込みのダウンライトひとつがあるだけでも空間に対する影響が強いからです。計画中に考えあぐねていたところ、出合ったのがキャンドルホルダーでした。青山で食事をした後に立ち寄った骨董店で、スペインの修道院で使っていたというものを見つけました。根元で左右に動くように、パーツを自分で購入して壁に取り付けています。とはいえ、本を読むときには裸電球をぶら下げますし、電気照明はキッチンや庭、トイレなどにあるので、それらの照明をつけているとこのダイニングにも光は適度にまわってきます。

——この家で気になったのは、まわりに対しては閉鎖的な顔をしていることです。

保坂 自分も設計するときには「住宅が閉鎖的な顔をしているのはよくない」と思い、じつは当初、北側に横長の窓を付けていました。道路側のキッチンのシンクがある位置です。風が通り、道路の様子も見えるのでいいと思っていたのですが、現場で取り付けられた窓を見ると、どうもしくりとこない。窓がなくても成立はするので、ふさいでしまいました。平日は朝に出勤し深夜に帰ってくる生活で留守にしている時間が長く、窓があるとかえって防犯上よくないとも考えました。確かに、まわりは古い建物が多く、住民はお年寄りも多いので、違和感をもたれないかと思いました。でも、暮らしてみるとまったく問題はありませぬ。というのも、自分たちがいるときには玄関扉を開け放していることが多いのです。それだけで近所の人との交流は自然に生まれています。

新しい言葉とともに、新しい平面を発見したい

——保坂さんの設計する家は、感性だけでなく関係性をつくる論理もあり、そのあいだでうまくいっ

ているように思います。そのあたりは意識されていますか。

保坂 「内と外」というところで論理的な部分はあるでしょう。またそれぞれの敷地やプロジェクトで、新しい提案ができそうで「おもしろくなりそうだ」と高揚するときには論理とは別の感性が入ると思います。そうなるまでにはいろいろと試みます。模型はまず、スタイロフォームで200分の1ほどのスケールの模型を50個くらい大まかにつくります。改善しながら「これはおもしろそう」というものを見つけていきます。

本郷台キリスト教会 チャーチスクール 保育園

「か」と「外」を混ざると「かき混ぜる」みた建物。コンセプト（写真=西川公朗）。



もちろん、スケッチでも考えます。「本郷台キリスト教会チャーチスクール保育園(2010)では、筆描きでぐるぐるとプランをつくりました(写真とスケッチ参照)。コーヒーをミルクと混ぜるように、屋内と屋外、建物と森をかき混ぜるプランは、スケッチをしながら思いついたものです。最初はフリーハンドの曲線で描いていたのですが、手の動きは直交グリッドに置き換えができました。するとリアリティがありながら、この建物での原理は損なわれずに実現できると思ったのです。内と外をつなげ

る、または連結させることを考えていて、その前には、中庭をいくつかつくる案もありました。外と「溶け込んでいる」状態ではあったのですが、「新しい外」といえるものではないかとやっていたうちに、「かき混ぜる」という意味で、新しいプランが導き出されました。

——そうしたコンセプトは言葉として出てくるのでしょうか。

保坂 キーワードはプロジェクトごとに発見していかないといけないと思っています。自分は、学生の頃から住宅をつくりはじめ、そのまま仕事として続

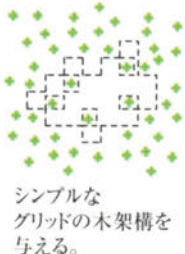
step 1



step 2



step 3



けています。設計事務所で建築家の先生について、その手法を踏襲し、または反発しながら切りひらく方法もありますが、自分にはそうしたベースがないので、設計は自分で発見していくものから進めていくほうがありません。

少し図々しいかもしれませんが、新しい言葉とともに、新しい平面が発見できるかと思えます。別の大きなプログラムになっても、「内と外」についてはまだやりようがあるので、この先も探っていきたいと考えています。

LOVE HOUSE



光の変化をつねに感じるテラス。

建築概要

所在地	神奈川県横浜市
主要用途	専用住宅
家族	夫婦
設計	保坂猛／保坂猛建築都市設計事務所
構造	坂根構造デザイン
施工	栄港建設
構造 規模	木造 地上2階建て
敷地面積	33.16㎡
建築面積	18.96㎡
延床面積	37.92㎡
設計期間	2004年4月～2005年3月
工事期間	2005年3月～7月

おもな外部仕上げ

屋根	シート防水
外壁	モルタルt=20mm白塗装(ローラー塗り)
開口部	木製サッシ

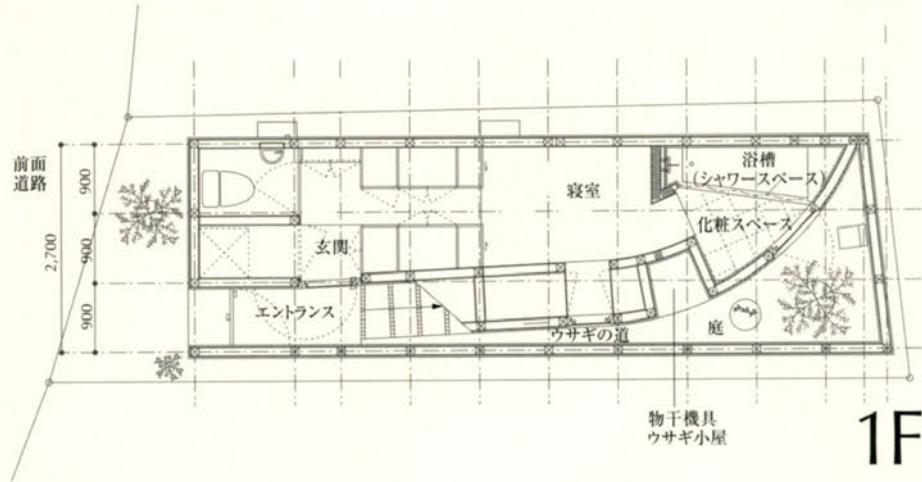
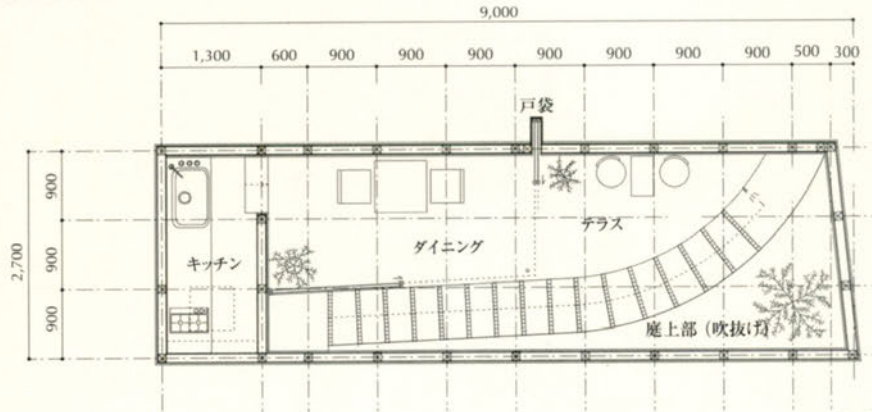
おもな内部仕上げ

ダイニング	
床	モルタルt=20mm
壁	モルタルt=20mm白塗装(ローラー塗り)
天井	PBt=12mm白塗装(ローラー塗り)
テラス 階段	
床	FRP防水モルタルt=20mm
	階段鼻先:大理石50mm角
壁	モルタルt=20mm白塗装(ローラー塗り)
天井	ケイカル板t=5mm白塗装(ローラー塗り)
寝室 トイレ	
床	無垢サクラフローリングt=15mm
壁 天井	シナ合板t=12mm突付け
化粧スペース	
床	大理石300mm角
壁	モルタルt=20mm白塗装(ローラー塗り)
天井	ケイカル板t=5mm白塗装(ローラー塗り)
シャワースペース	
床	基礎一体コンクリート FRP白
壁	モルタルt=20mm FRP白
天井	ケイカル板t=5mm白塗装(ローラー塗り)

平面図

0 0.5 1m

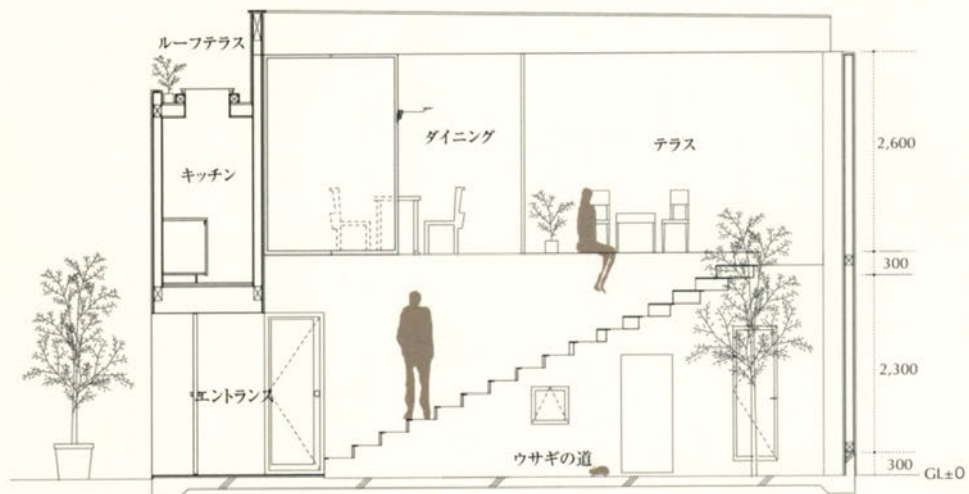
1/100



断面図

0 0.5 1m

1/100



Interview with Hosaka Takeshi

ほさか たけし / 1975年山梨県生まれ。99年横浜国立大学工学部建築学科卒業。99年建築設計SPEED STUDIO共同設立主宰。2001年横浜国立大学大学院修士課程修了。04年建築設計SPEED STUDIO設立。04年保坂猛建築都市設計事務所設立。現在、国士館大学 法政大学非常勤講師。おもな作品「保坂邸(03)」「アクリルの家(06)」「水戸の住宅(08)」「屋内の家+屋外の家(09)」「HOT FUDDO(09)」。

すべてが
うまくはまる
瞬間を待つ

Harada Masahiro + Harada Mao



全面写真／旗竿敷地に立つ「near house」は、旗部分の「メインハウス」と竿部分の「ゲートハウス」の2棟に分かれている。写真は「メインハウス」2階のリビング・ダイニング。右手は隣家、左手開口部は中庭に面している。下／道路に面した「ゲートハウス」。普通なら駐車スペースとなる部分。

原田真宏 + 原田麻魚

建物名

「near house」





原田真宏さんと原田麻魚さんがつくる建物群には、ひと目で彼らの仕事とわかるような“作風”はない。かといって、毎回変えることを意識しているような力みもない。そんな、不連続感の裏で連続する建築原理は何か。近作「near house」で聞いた。

まとめ/加藤 純 写真/傍島利浩



Special Feature / Seeking New Concepts in Architecture

Interview 3



特集
設計の手がかり
インタビュー 3

——原田さんたちにとって、建築原理、設計の手がかりとはなんですか。

原田真宏（以下、真宏）　ひと昔前、建築家は自分たちの職能そのものを設計していた時期がありました。同時に、建築家すごろく。のゲーム盤も出来上がった。今ではどの程度いいところまで進めるかを競っているかのようなです。サバイバルがきびしい世界なので、研究熱心で戦略的になるのはしょうがないのでしようが、そこに熱心になりすぎると、じつは短命に終わってしまうかもしれません。

僕たちはゲーム盤ができる前の段階に戻りたいと思っています。実際の都市の問題や生活の質は以前とは変わっていますから、それを新たに解釈しながら建築の組み立て方を考えたい。たとえば、ポストモダンの後にコンテクスチュアリズムがもてはやされたことがあります。敷地周辺や昔の地図を頼りに軸線を引っ張ってくるなどしたうえで、建築デザインを決定するという概念的な手法です。でも建築はあくまで実体として立ち上がってくるものです。単なる概念ではない。そこで現実の環境が良好なものになっていくかという問題に関心が無いのはおかしいと思います。あくまで僕たちはデザインによって現実の環境を操作しているのです。このダイレクタな環境の操作を振り返ったとき、それが「建築」と呼ばれるべきだと考えています。「建築」という概念の更新を続けているのかもしれませんが。

原田麻魚（以下、麻魚）　私は同じようなことを、以前お世話になっていた象設計集団の樋口裕康さんに叩き込まれました。「われわれは文化や文明といった人間の総合的な前進を目指している。建築のために建築を建てるな」と言われていました。建築を目的とするのではなく、自分のつくった建築が何をな



「ゲートハウス」1階から中庭越しに「メインハウス」を見る。中庭両側には隣家が迫って立つ。

「ゲートハウス」2階の書斎から「メインハウス」方向を見る。柱梁架構のピッチは両棟とも450mm。

すのかをきちんと考えるように、ということ。建築界のなかでの相対的な関係性は、度置いておき、世界に自分の足で立つて必要なことをする。そうすれば自然と建築界でのポジションもできていくと思っています。

真宏　建築をつくる方法論というとき、一般的にはその対象として「空間」を意識していますよね。空間にはさまざまな成分が含まれています。具体的な場所や経験する現象ということもありますが、空間の主成分は概念です。「空間がある」と指でさしてもそこには何も無いという、きわめて知的なもの。そして「空間の構成」というときには、頭の中で透明

なゼリーのような立方体を並べて考えるようなことをします。後期モダニズム以降の建築ではとくに、空間の構成や配置が設計対象とみなされてきました。でも僕たちが本当に設計しなければいけないのは、総合的な環境だろうと考えています。環境は、「空間」と「場」に成分分析されます。場は、あるものが存在するときにまわりに広がる雰囲気のようなものです。建築家は昨今、概念上の空間操作手法、辺倒で設計してきたのですが、僕たちはそれでは足りないと感じています。概念上の方法論そのものを当然もっているしそれを使うのだけれど、「作家性」として標榜しないように気をつけています。向き合わなければならぬテーマとして物性があり、そのまわりの場というものがありません。六面体の箱をつくり、そのまわりにベタベタと何か張り付ければ建築になるという考え方には違和感があります。建築家は空間のほかに物性、たとえば物自体がなりたがっている構成への感受性をもたなければいけないと思っています。

自然科学の合理性が構成と出合うところ

——なるほど。ただ、今の話からは自分たちの感性に寄りかかると危うさを感じます。真宏　そうですね。感性の世界にいくと説明が不可能な領域に入ってしまう危うさはあると思います。ただ、物性の世界での合理性というとき、それは自然科学の言語で説明できることなのです。何かを設計するときに工法や構造などの合理性を背景にもつていけば、感性の世界も扱えるなと思いました。最初の「X



「メインハウス」2階
南西側の大開口。平
屋隣家の瓦屋根と樹
木を借景として生か
している。



Interview with Harada Masahiro + Harada Mao



自分が入っている建物を
外から見られるというのは
おもしろいものです。

写真下右／「メイン
ハウス」2階から「ゲ
ートハウス」を見る。



写真上中／「メイン
ハウス」1階寝室。
床レベルは地面よ
りも150mm低い。上
左／2階キッチン
側を見る。床、キ
ッチンの面材、階
段手すりなどはM
DF製。

XXX house」(2003) / 『TOTTO通信』2010年春号)のときに、合理的な工法を含めた自然科学の言説を身につけることができたいと思います。この「near house」でも、素材や構成をそれぞれ考える方で、つくりやすさや構造の明快さ、健全さから建築の形式を選んでいくわけです。空間を構成するという概念で建築を扱うことと、自然科学を背景とした合理性で物性や場を考えると、この両方が合わさったところに、僕たちの建築の方法論があると思います。

麻魚 技術的な蓄積があるからこそできる案もあります。この住宅でも見積もり前に、集材材をつくる業者に相談し、強度や構造形式を確認しました。形や構造、素材はつねに同時に考えています。私たちの設計のプロセスはリアではないので説明しづらいんです。

真宏 すべてがうまくはまる瞬間を待つ、という感覚ですね。

—— つひとつの建物は結果として作風が異なるように見えますが、ベースは共通しているわけですね。真宏 自分で自分の作家性を規定するのはどこかおかしいと思っています。毎回異なる状況に決まったスタイルを持ち込むのは不自然です。建築家の役割は複雑な状況を合理化し抽象化することだと思っています。そうして最適なものを見つける瞬間が、じつは最も楽しい。そこと付き合うのをやめてしまったら建築家の職能はだいぶ失われてしまう気がします。麻魚 最後に出来上がったものから、私たちのフレーバーが感じられればいいと思います。最初からフレーバーがこれです、と押し出すのではなく。

「near house」 この街の肌理の 細かさから

——この「near house」では、ふたりの方法論はどう適用されましたか。

真宏 この家を考えるのに、ふたつのアプローチをとっています。ひとつは空間の構成からです。小さいボリュームと大きいボリュームを設け、あいだに中庭を挟むという基本的な構成です。旗竿敷地の建ぺい率を有効利用することと、建て主の職業と生活を読むことから生まれた発想です。旗と竿での分棟ですね。もうひとつは、この街の肌理の細かさからアプローチです。たとえば土地割りや住宅のサイズを俯瞰してみると、ほかの地域に比べて小さく、住宅同士が密接しています。設計にあたって現地を訪れると、隣の家やアパートは近い距離にあり、そ



にしたという意識がありました。麻魚 自分が入っている建物を外から見られるというのはおもしろいものです。電車の端のほうに乗っていて、大きくカーブするときに自分の乗っている電車の外側が見えてくるとワクワクしますよね。そういう経験が建物ではほとんどなくて、中に入ってしまうとどこにもあまり変わらない。それができると訴えるものができますね。

——隣の家に面する大開口の景色がいいのですが、いずれこの借景はなくなるかもしれませんね。

真宏 そうですね。取り壊されて新しく大きなボリ

これらの外形よりも外壁や瓦といった物の肌理が目に入ってくるということに気づきました。それで、肌理の配分を主題としてつくるほうがうまくいくのではないかと。肌理を感じさせるには、なるべく細かいモジュールとして、いろいろなものが近くなるような建築をつくってあげればいいと思ったのが出発点です。結果的に柱梁架構を450mmピッチで反復させています。

——分棟にして、視線が行き交うようにしたのは新鮮ですね。真宏 視線を引き延ばすことで、中庭も内側のよう

ユームが建てられる可能性もあります。東京では、都市の状況は固まらずに、時的なものです。都心では定常的に条件のよい敷地はめったに出てきませんが、アクセシブルなよい状況というものはありません。それをいかに生かせるかが重要だと思います。もちろん、竣工時にしか成立しない家ではいけません。この家では隣の状況が変わったとしても、中庭によって定常的な居住環境の質を担保しています。都心部の住宅ではアクセシブルのようなメリットも積極的に受け入れることで、幸せな暮らしを実現したいと考えています。

写真上 / 「メインハウス」1階浴室から道路側を見通す。下 / 玄関から見た洗面室、浴室。左ページ / 周辺の街並み。

near house



建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦
設計	原田真宏+原田麻魚/ MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO
構造	佐藤淳構造設計事務所
施工	伸栄
構造 規模	木造 地上2階建て
敷地面積	66.42㎡
建築面積	37.65㎡
延床面積	75.30㎡
設計期間	2008年9月~2009年4月
工事期間	2009年7月~2010年2月

おもな外部仕上げ

屋根	珪酸カルシウム板t=6mm ウレタン塗膜防水トップコート 防水層保護塗料
外壁	窯業系サイディングt=14mm ウレタン塗膜防水トップコート 防水層保護塗料 フレキシブルボードt=8mmUP
開口部	スチールサッシ、ステンレスサッシ

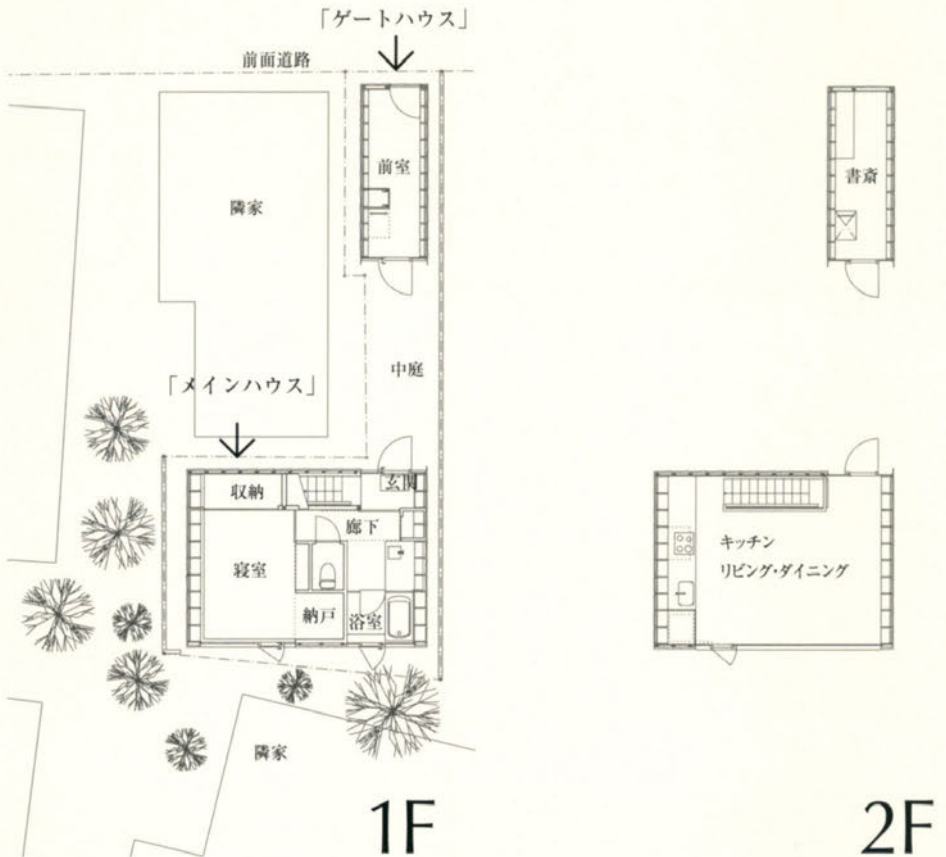
おもな内部仕上げ

共通仕上げ(洗面室 浴室を除く)	
柱 梁	カラマツ保護剤塗装
壁	MDFt=9mm撥水剤塗装
天井	MDFt=9mm
ゲートハウス(前室)	
床	モルタル金ゴテ仕上げ撥水剤塗装
ゲートハウス(書斎)	
床	MDFt=15mm撥水剤塗装
メインハウス(玄関)	
床 立ち上がり	モルタル金ゴテ仕上げ撥水剤塗装
メインハウス(洗面室 浴室)	
床 壁	カラーモルタル撥水剤塗装
天井	珪酸カルシウム板t=5+5mmAEP
メインハウス(トイレ、寝室、リビング ダイニング キッチン)	
床	MDFt=15mm撥水剤塗装

平面図

0 1 2m

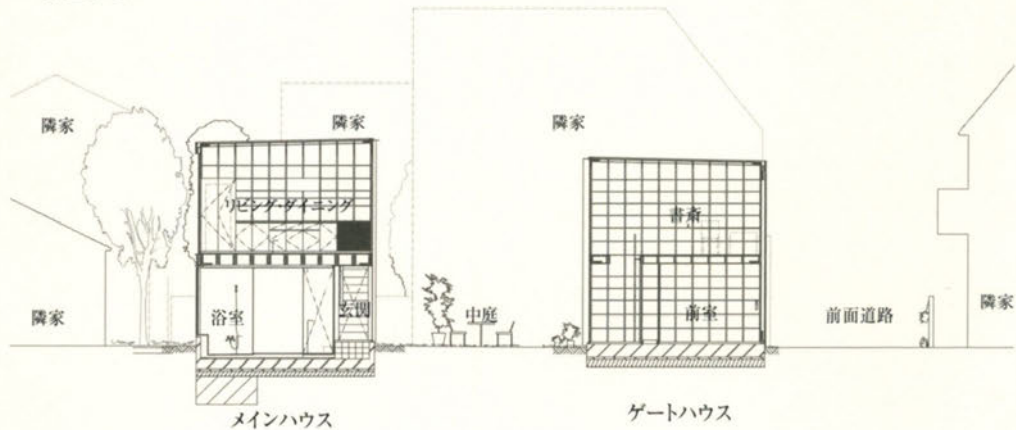
1/200



断面図

0 1 2m

1/200



Interview with Harada Masahiro + Harada Mao

「おまな作品」『XXX house』(03)、『M3 KG/大きな家』(06)、『目黒の住処』(07)、『雨晴れの住処』(08)、『PLUS』(09)、『Tree house』(09)。

はらだ まさひろ / 1973年静岡県生まれ。1997年芝浦工業大学大学院修士課程修了。同年隈研吾建築都市設計事務所、2001年文化庁芸術家海外派遣研修員制度によりホセ・アントニオ&エリアス・トレスアーキテクト、03年磯崎新アトリエを経て、04年原田麻魚とMOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO設立。現在、芝浦工業大学工学部建築学科学准教授。はらだ まお / 1976年神奈川県生まれ。1999年芝浦工業大学工学部建築学科学卒業。2000年建築都市ワークショップなどを経て、04年原田真宏とMOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO設立。

全面写真／芝が張られた車庫の屋根から見た「SPROUT」南面。上右／埼玉県の專業農家。左手母屋と右手土蔵のあいだから見る。上左／北西側外観。要望のあった8台分の車庫に対し、それと住環境を両立させるところからこの形が生まれた。



理にかなう形がある

Mineta Ken+Onda Ei

峯田 建 + 恩田恵以

建物名

「SPROUT」

地球環境を設計のテーマとする建築家は多い。
峯田建さんと恩田恵以さんも、
そこに含まれるようだ。
けれど、別の原理からの発想の飛躍も感じる。
そのあたりを確かめたいと、住宅「SPROUT」へ。

まとめ／加藤 純 写真／傍島利浩



Special Feature / Seeking New Concepts in Architecture

Interview 4



特集
設計の手がかり
インタビュー 4



写真上3点/車庫は鉄骨造。木造の住居部分とは900mmの隙間をとって、構造的に緑が切られている。本体（住居部分）の軒天に張られた塩ビ板に芝が映り込む。

——この特集では、設計の手がかりを建築家のみなさんに聞いてまわっているんです。

峯田建 敷地を訪れたときの第 印象を大切にします。「気持ちいい」「湿っぽい」などの感覚です。その後、建て主がどのような住まい方をしたいか、どのような機能がほしいかを摺り合わせていき、敷地のなかでの居場所の配置をしていきます。

恩田恵以 いつもはじめから何かテーマを決めているわけではありません。建て主からの条件が予想だにしないものである場合もあり、そこからヒントを得ることもあります。

そして、とくに峯田は地球環境のことを考えていて、建築のLCC（ライフサイクルコスト）に無駄がないようにする、という思想をいつももっています。

「SPROUT」 第2の地面を 空中につくる

峯田 「SPROUT」の立つ敷地は、江戸時代に新田開発された地域にあり、長手方向に1kmほど

ある区画です。周囲には里山が残り、農地でとれたものを消費する循環した生活が営まれています。ここに駐車場として使っていた老朽化した納屋があり、そこを取り壊して母屋とは別に、子世帯のための住まいをつくることが要望されました。母屋を改造して親世帯と 一緒に住むことや、敷地内にある築100年ほどの蔵を改造して住むことも提案しましたが、やはり離れを新たに建てることになりました。す

けです。最も大きな要求は、車8台分の駐車スペースです。農作業のための車両が行き来する敷地内の道に面すること、また屋根付きとすることが必要でした。当初は1階が駐車場で2階が住居とする案も考えていました。

恩田 1階をすべて駐車スペースとする場合、スパ

——スカートのように屋根が建物のまわりに取り付





Interview with Mineta Ken + Onda Ei



現代の環境と、
今でも残っている江戸時代の環境を
もう一度つなげること。

写真上／2階リビング。
開口部の下端と
芝の高さが揃っている
ので視線が延びる。



写真右／1階寝室。
床を地面から350mm
下げ、壁に凹凸をつ
けて外部からの視線
を調整している。中
／2階上部は回廊状
のロフト。左／車庫
と玄関。

く様子は特徴的です。

峯田 下屋をぐるりとつなげる必要はなかったかもしれませんが、車庫の屋根を第2の地面（庭）と見立てることを思いついたら魅力を感じて、どの窓にも庭をもたせたくまりました。屋根の下は、北側は設備的なスペースにあって、車の動線に面した南側は農作業の合間に休憩するスペースとしています。この車庫の屋根によって、2階から車両の姿は遮られます。1階でも床レベルを地中に少し落とし、壁に凹凸をつけることで、家のそばを通る車両の存在を感じにくくしました。こうしてできた住宅は、眠る場所としての「地中」と、活動する場所の「地上」を行き来する屋内空間をもちます。

恩田 鉄骨造の下屋が木造の建物本体と900mm離れているのは、混構造とみなされると確認申請に長い時間がかかってしまうからでした。構造として縁を切っています。

峯田 下屋と本体の建物とのあいだにスリットができることで、光が下に落ちて1階まわりが暗くなることを避けることができました。2階では開口の下端と芝の高さを揃えることで、芝に取り囲まれるような雰囲気を出しています。さらに軒を出すことにより生活空間の視線を上下に絞り込むように操作し、周囲の緑をより遠くの緑とつなげるとともに屋内に引き寄せようと考えました。2階の窓の高さは床から1610mm、下端720mmで、座るとちょうどよい高さになります。そして軒下で光は反射して、芝の映り込みと一緒に室内に導かれるようになっていきます。

恩田 軒下は本当はガラスにしたいと思っていたのですが、高価なことと脱着時の危険性があることから、透明の塩ビ板を張っています。私たちは、窓を設けるときには基本的に軒を出しています。今回は窓の上部の軒裏に空間を設け、予備の収納スペースとしました。2階では四方の壁に窓を設けているので、収納を軒裏に確保したわけです。

ひとつの造形操作でふたつのおもしろいことを

——合理的だと思うのですが、地面を空中に上げるというアイデアの飛躍がありますね。それがどこから生まれたのかに興味があります。

峯田 この形になった明確な理由は、じつは自分たちでもわかりません。たぶん機能の合理性だけで解いていないからでしょう。この住宅のメインの考えは、現代の環境と、今でも残っている江戸時代の環境をもう一度つなげることで、それは形態操作を



ダイニングテーブル状態越しに、座った状態で外の視線の高さを見る。

操作が、ふたつ、3つのメリットを生むようにしたいと思います。そうすることで、とてもスマートな造形になるのではないかと考えています。自然の造形に引かれるのもこうした理由でしょうね。とても理にかなった形をしています。

恩田 自然の摂理も理にかなっていますね。虫がつくときに、害があるからといって 匹ずつつぶしていても、ほかに害がおよぶようなことが起こってしまいます。そこだけ食べさせることで被害を抑えられることがあり、結果的に無駄も生じません。できれば設計でもひとつの問題や事象だけでなく、総合的な関係を俯瞰して考えたいと思っています。

峯田 そうした意味でも、バナキュラーな建築にはたくさんアイデアが詰まっていますね。美しい集落は機能も兼ね備えています。この家では環境と対応する装置として、屋根の最頂部に井戸水を散水する仕組みを設けました。散水すると壁面を伝い流れ、第2の地面に植えられた芝の上に落ちて灌水します。ここで30mmほどの深さで溜まってオーバーフローすると、軒先から地面に流れ落ちるといいます。壁は多孔質の火山灰を配合した塗り壁で、水が染みてゆっくり流れるようになっていきます。一部に藻が生えてきましたが、洗えば落ちます。

峯田 芝の水分が気化するときの熱を奪う性質を利用し、夏場の涼をとることもねらいました。こうして、適宜水やりを必要とする外皮をまとった建築になっています。リビングで調理用オーブンの付いた薪ストーブを導入しているのも、この住宅では薪が周囲からとれ、ふんだんに使うことができるためです。このように自然の恵みにあやかる仕組みを全体に与えることで、場所とのかかわりを回復するスタウンダードな姿が現れるのではないかと考えています。

SPROUT



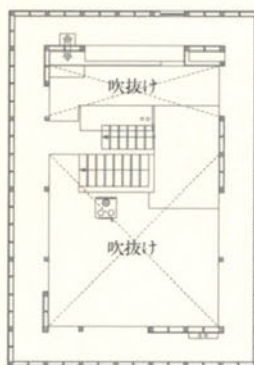
0 1 2m
1/200

写真下/1階洗面所。
左/2階リビング。
白い壁の裏側にキッチンがある。

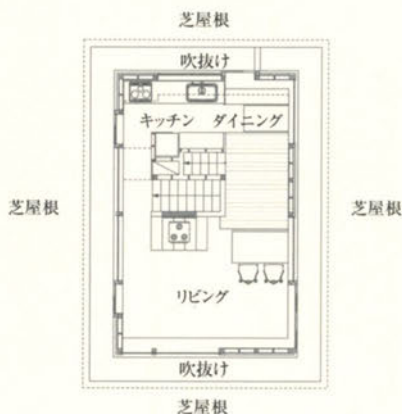


建築概要	
所在地	埼玉県所沢市
主要用途	農業用施設+住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	峯田建+恩田恵以/ スタジオ アーキファーム一級建築士事務所
構造	今井建築構造設計事務所
施工	南藤建設工房
構造 規模	木造、鉄骨造 地上2階建て
敷地面積	2,232.73㎡
建築面積	149.89㎡
延床面積	91.08㎡(含ロフト)
設計期間	2008年1月~2009年1月
工事期間	2009年2月~2009年8月
総工費(外構 造園含む)	2,537万円
おもな外部仕上げ	
屋根	ウレタン防水シート、高麗芝(自主施工)
外壁	スギ板キシラデコール(自主施工)、 白洲そとん壁t=18mm
軒下	塩ビ板クリアt=5mm
開口部	木製製作建具、アルミサッシ(浴室)
外構	砂利、大谷石600mm角(アプローチ)
おもな内部仕上げ	
リビング・ダイニング	
床	パイン緑甲板t=18mmオスモフロアクリア
壁	シナベニアt=3mm素地 中霧島壁t=3mm PBt=12.5mm下地
天井	シナベニアt=3mm素地 PBt=9.5mm下地
キッチン	
床	パイン緑甲板t=18mmオスモフロアクリア
壁	シナベニアt=3mm素地 PBt=12.5mm下地、 一部フロストガラスt=5mm
天井	シナベニアt=3mm素地 PBt=12.5mm下地
トイレ 洗面所	
床	パイン緑甲板t=18mmオスモフロアクリア
壁	中霧島壁t=3mm PBt=12.5mm下地
天井	中霧島壁t=3mm PBt=9.5mm下地
寝室	
床	パイン緑甲板t=18mmオスモフロアクリア
壁	中霧島壁t=3mm PBt=12.5mm下地
天井	現し

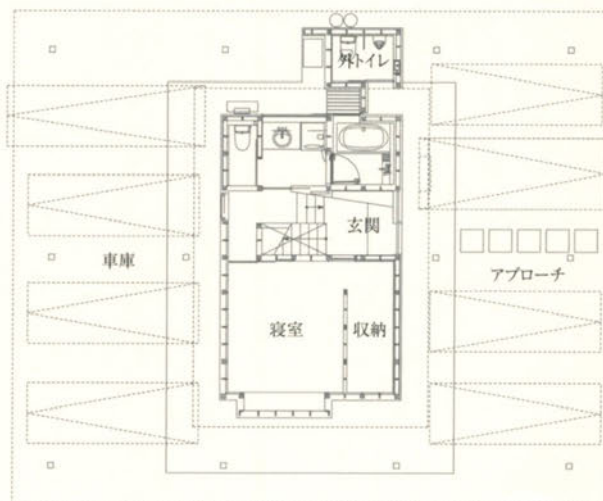
平面図



Loft



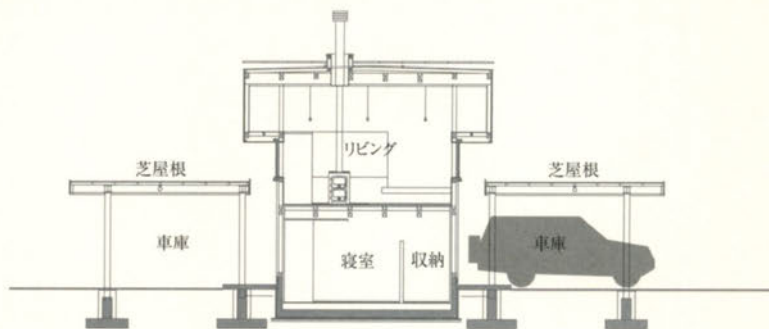
2F



1F

断面図

0 1 2m
1/200



Interview with Mineta Ken + Onda Ei

おもな作品「ギャラリーヌデ」(00)、「Ora」(05)、「大横精機本社工場」(05)、「Seedshair」(06)、「箱根の山荘」(06)、「川越の家 TERRA」(07)。

おんだ えい/1969年東京都生まれ。92年東京藝術大学建築科卒業。94年同大学大学院坪井研究室修了。94~95年伊藤平左工門建築事務所。96年スタジオアーキファーム設立。95~2005年すいどーばた美術学院建築科講師。

みねた けん/1965年山形県生まれ。91年東京藝術大学建築科卒業。93年同大学大学院修士課程修了。同大学将来計画準備室助手。96年スタジオアーキファーム設立。現在、東京藝術大学 千葉大学 東京理科大学 京都造形芸術大学非常勤講師。

河内一泰

建物名

「KCH」


中古住宅のリノベーションという建築行為は、
ストック再生、経済性、エコなど、
前向きなテーマをたくさん含んでいる。
なかには、設計の手がかりを見つける人もいるようだ。
河内一泰さんはそんなひとりかもしれない。

まとめ/加藤 純 写真/傍島利浩



皮膜一枚があって

Kochi Kazuyasu



写真右ページ / 「KCH」の3階テラスからの見下ろし。既存の外壁の900mm外側にFRP製の波板を立て、外階段がつくられた。左ページ / 薄い表層が閉鎖感を感じさせない正面外観。左手扉が事務所の入り口。



写真上／外階段見上げ。中／2階住居の床。既存の階段を撤去して強化ガラスがはめられた。下／両面にFRPの波板を張ったフレームはアルミ材。

——今日うかがった「KCH」は、今回唯 のリノベーションです。事務所を兼ねた自邸ですから、基本原理が反映されているのではないかと思います。河内一泰 以前はまわりの環境や敷地の問題に対して解決を与えることが建築の役割としてとらえられていたように思います。しかし、今では問題解決は建てる時のおもな動機ではなくなってきました。私が今、住宅にどのような可能性があるかを考えるときには、問題解決+αを探しています。自分にとっては、生活や街を楽しむことがそれにあたるのかもしれません。空間としてすごいものをつくることのできれば、設計した建築家は満足すると思います。が、住宅ではとくに建物と建て主の生活の両方が必要だからです。学生時代に教えられたのは「建築Ⅱ空間であり、その空間をどうつくるか」ということに主題が置かれていたように思います。しかし設計活動の実務を通して、空間がよくても生活が変わらないとあまり意味がないと感じています。建て主の生活が変わるような建築ができるように設計したい。それはリノベーション的な考えといえますか、これまでの生活の形式や建物の工法について、みんなが思っている前提をどのように編集して提示するかということがあるように思います。こうした発想をするときには、素材に特別なものを用いたり、独自の方法論やコンセプトを打ち出して住宅で表現することは、さほど重要ではなくなります。

——人の生活に触れて変えてしまうというと、反発もあると思いますけれど。

河内 そのやはりたいですし、建築家として生活を変える提案をしないといけない、と思っています。多くの住宅業者が宣伝している絵は 般の方の願望を集積したもので、これまでの生活とじつは何も変わっていません。建て主のイメージと完全に一致することはありえませんが、たくさんの要望が含まれていたとしても時間の経過とともにずれしていきます。もちろん建て主の希望やイメージを最初にたくさん聞きますが、距離を置くことが大事だと思います。みんながもつ価値観や常識からはずれた住宅、「どう

「KCH」 自由な断面 という手法

——より普遍的な建築の原理ということでは、何を考えますか。

河内 最近「自由な断面」ということに興味があります。ル・コルビュジェの掲げた「近代建築の5原則」では、「自由な平面」「自由な立面」がありました。ただ、断面とは言っていないですね。なぜかという、自由な断面を突き詰めていくと、平面は自由度が少なくなっていくからです。でも、床の位置を固定せずに考えて断面を自由にしていくことで、立体的な関係性をもっと豊かになるのではないかと考えています。今、そのテーマで住宅をいくつか設計しています。在来工法がもつとされるモジュールや大きさからも離れることで、さまざまな高さの床があって空間が混ざりやすいような家をつくりたいと考えています。

自由な断面という手法に気づいたのは、この自宅兼事務所をつくる途中でのことでした。中古住宅を購入してリノベーションしたのですが、解体から自分たちが入り、つくりながら計画していきました。不動産情報では「木造2階建て」として売りに出されていたのですが、実際には屋上のテラスと地下の



2階のリビング・キッチン。ダイニング・キッチンも耐震補強されている。正面奥に3階へ上がる階段（既存）がある。



Interview with Kochi Kazuyasu

高さ1.5mの基礎を生かした半地下のスペースから、事務所全体を見る。半地下は河内さんが手作業で掘ったという。天井高は4m。左手開口部は道路に面している。

上下の空間を考えると
可能性がたくさんあることに
気づいたのです。



倉庫がありました。さらに、道路から敷地の奥に向かつて地盤が下がっていて、高基礎になっているのではないかと予想しました。実際に高基礎だったのが、1階の床下を掘って天井高を大きくとることができました。また、もともとあった1、2階をつなぐ階段はふさいで下の仕事場と上の住宅とを分けようと工事を始めましたが、階段を取り除いてできた孔を見ていると残したほうがよいと感じ、ガラスをはめました。打ち合わせスペースとなった半地下の4mの天井高は気持ちがいいものですし、小さな子どもが上から仕事場をのぞき込むのもおもしろいのです。木造2階建てとして定まっている形式であっても、上下の空間を考えるとときに可能性がたくさんあることに気づいたので。

外側を 考えること

この建物で私たちがとても興味をもったのは、薄い表層です。薄く透き通るファサードが屋根根まで続き、既存の外壁とのあいだにスペースを設けることで内部空間がギリギリ保たれているように思います。

河内 周辺は住宅が建て込んでいますが、それぞれが家の前の通りに植栽を置くなどして親密に付き合っています。私たちも街に開きたいと思っていますが、ある程度プライバシーもほしい。元の家では窓にくもりガラスが入っていたのですが、透明ガラ



写真上／改修前の外観。築約30年の木造住宅（写真＝河内建築設計事務所）。左ページ／ファサード見上げ。1階事務所入り口と2階住居への外階段。



写真上右／3階テラス。左手に寝室。上左／寝室からテラスを見る。高さ制限のため天井高は1.9m。

スに入れ替えたうえで、スキンをもう一枚つくることにしました。既存建物の仕上げのうえに防水紙とガルバリウム鋼板を施し、道路面だけにさらに外側にFRPのスキンを付け加えるという構成です。

FRPの波板はフレームをサンドイッチするように固定されています。両側から板を張ることで、スキンの厚さやモジュールを感じさせないようにと考えました。波板は

この界限の建物でたくさん使われているデザイン要素です。フレームは、通常の建築では使われない40mm角のアルミ材を中心とした規格部材です。このスキンにあける開口部の位置は、道路を挟んだ隣家との見え方で決めています。

また、スキンと外壁のあいだは完全な外部ではなく、インテリアのような空間にしたかったので、階段室や住戸玄関は、部にFRPを屋根状に架けたり、打ち合わせスペース前は縁側のようにしています。3階のテラスも部屋のようにしたいと思い、インテリア用の照明器具の中に防水のランプを入れて部屋の雰囲気を出しています。

外観を考えることはずっと続けています。私は以前、難波和彦さんの事務所で「箱の家」を何軒か担当しました。そのときには室内を深く検討していたのですが、外のことも室内と行き来しながら考えたと思っています。以前は「建築は内部空間を確保するためのもので、外観は結果的に出てくるもの」という考えがあったと思います。しかし今自分は、住宅のまわりに対して考えていくことで、建物の外形や外観で周辺の環境とどのようにつなげるのかという点に関心があります。

かつては住宅をつくるときにも「都市」という相手をとらえて考えていたようですが、今の時代には、都市全体というよりも敷地の少しまわりの街に対するスケールを考えたい。そういう意味では、前提条件はよりはっきりしてきているように思います。

KCH (改修)



建築概要

所在地	東京都豊島区
主要用途	事務所+住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	河内一泰
構造	河内建築設計事務所
施工	河内建築設計事務所+杉本興業
構造 規模	木造 地上3階建て
敷地面積	64.66㎡
建築面積	37.78㎡(建ぺい率58.4%、許容60%)
延床面積	91.78㎡(容積率141.9%、許容160%)
設計期間	2008年5月~2009年3月
工事期間	2008年5月~2009年3月
総工費	1,200万円
おもな外部仕上げ	
屋根	カラーガルバリウム鋼板白立てハゼ葺き t=0.4mm
外壁	カラーガルバリウム鋼板白波板t=0.4mm
開口部	アルミサッシ
外構	碎石敷き
おもな内部仕上げ	
仕事場1	
床	レベラーモルタルUC
壁	構造用合板t=12mmEP白
天井	既存梁現しEP白
仕事場2	
床	ラワン合板t=12mmUC
壁	構造用合板t=12mmEP白
天井	既存梁現しEP白
リビング ダイニング キッチン	
床	パインフローリングt=21mmUC
壁	構造用合板t=12mmEP白
天井	既存梁現しEP白
寝室	
床	パインフローリングt=21mmUC
壁 天井	構造用合板t=12mmEP白

改修後

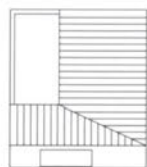
断面図



立面図



平面図



RF



3F



2F



1F

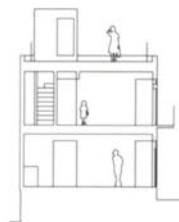
1/350

0 2 4m



改修前

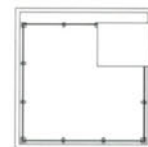
断面図



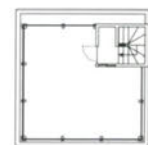
立面図



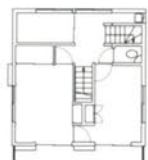
平面図



RF



3F



2F



1F



Interview with Kochi Kazuyasu

こうち かずやす / 1973年千葉県生まれ。98年東京藝術大学建築科卒業。2000年同大学大学院修士課程修了。00年難波和彦+界上工作室設立。現在、芝浦工業大学 京都精華大学 日本大学非常勤講師。おもな作品「書家のアトリエ」(04)、「HOUSE kb」(06)、「HOUSE kn」(06)、「COLORS」(06)、「庭の家」(09)。

言葉を受け取った瞬間、
外観イメージ、素材、内部構成が
一挙に立ち上がった

Hyakuda Yuki

Interview with Onishi Maki + Hyakuda Yuki

イメージが 立ち上がるとき 言葉とルール

大西麻貴さん、百田有希さんのペアをインタビューする。大西さんは東京大学大学院博士課程在学中、百田さんは伊東豊雄建築設計事務所所属。すでに共同の事務所を立ち上げているが、住宅作品にはまだ完成したものはない。とはいえ、2010年9月に東京・谷中に着工したばかりのものが進行中。それ以外にプランが発表された別荘と福岡に完成したフォリー。ふたりは京都大学工学部在学時からコンペの登場回数と実績で知名度は高い。

取材 文／中原洋
写真（ポートレート）／山下恒徳
写真（建築）／スケッチ／大西麻貴＋百田有希

言葉と ルールの発見

建築家になりたいと、強く意識したのは伊東豊雄さんの影響があるという。非常勤で教えにきてい

た伊東さんに京都大学で出会い、その後福岡でワークショップを開いた伊東さんの指導のもとで、公園内に「地層のフォリー」を設計した（福岡の学生、小川勇樹、熊澤智広、南方雄貴を含めた共同設計／2009）。伊東さんにイメージ模型を提出し、「これは、浮かんだ洞窟だ」と言われた瞬間、自分自身のイメージがふくらんでいくのを感じたという。与えられた円形の土地がそのまま、十分な厚みをもって浮き上がり、内部に潜り込むような空間をもち、空へ抜けたり地下へ潜ったりすることで作品を完成さ

せた。ここで言葉の力を感じたという。ひとつの言葉で、外観イメージから素材、内部構成、そのほか一挙に立ち上がったという体験。さらに「穿つ穴を正方形に、それらが重なりあつて回遊できるひとつながりの空間」というルールが重要な役割を果た

「地層のフォリー」

写真右／ひとつの住宅のように、さまざまな場所をもつ。左／全景。直径13mで高さ3m。



大西麻貴＋百田有希

記憶のなかの空間が、
舞台装置のように
ひと連なりに蘇った様に似ている

Onishi Maki



Special Feature / Seeking New Concepts in Architecture



Interview 6

したと。

計画中の「千ヶ滝の別荘」(46ページ参照)にはイメージの飛躍がある。始まりのスケッチはなんと「走る家」「スカート」から。その因果関係は他者にはうかがいしれない。定着したのは湾曲する4枚の面で構成された屋根の形態が生まれたとき。「4枚の鉄板が自重でたわみ、互いに支えあうことで成立する」と構造の新谷真人さんに指摘されて具現化できた。鉄板の自重を利用するというルールに強く触発された。鉄板を切り込み、その部を引き上げることで開口が自然な力学で開く。内部天井の曲面はそのまま窓の形状へと流れていく。引き剥がされようとする鉄板の部が窓の開口となる。窓が取り付けられるのではなく、この鉄板のルールを明確化することによって内部空間の有り様が新しくなった。言葉を発見しながら、同時にルールを確認しながら設計行為が進むようだ。

東京・谷中の 螺旋の家

ようやく着工した
という谷中の住宅「
重螺旋の家」の模型
を見せてもらう。

土地形状は旗竿敷

地。長く細い路地を入るとその通路が、そのまま中央に建てられた鉄筋コンクリート造の塔状の箱を巡りながら最上階へ抜けていく。巡っていくと、住居としての変化に富んだ内部空間が繰り出されてくる。「SDレビュー2007」に出された「千ヶ滝の別荘」のプランを見て依頼してきた建て主と、空間の使い方を相談しながら決定してきたという。巡らされた階段や廊下、テラスはときに外部、ときに内部空間に取り込まれることで、思いがけない新鮮な空間を生み出しているようだ。

廊下部分の外装材はスギ板になるらしい。ガルバリウムでも白壁でもない。モダンデザインを離れた表現がここにある。まだ谷中には古い民家が点在す



Ground Folly

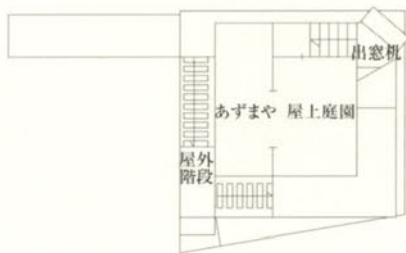
る。そのリサーチの結果、この地の風景になじむことを求めて決定したという。町の中で突出した建築物として造形する力みは消してある。

「千ヶ滝の別荘」の鉄の屋根に張り重ねられるのもスギ板。あらためてその決定要因を聞く。「時間とともに朽ちていく様子がどのようになるか」。その変化が期待値としてあるという。

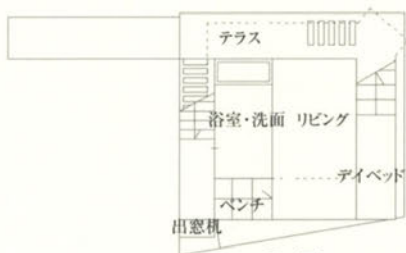
「『重螺旋の家』では、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』のなかにある、マドレーヌのくだりのイメージがあった」と言う。「この家は、すべての部屋がひと続きになった、とても経路の長い家。その空間の連なり方は、小説のなかで、冬の日の菩提樹のお茶に浸したマドレーヌの味わいから、幼い日の記憶のなかの空間が、舞台装置のようにひと連なりに蘇った様に似ている」とも。意識下の体験を探っていく作業もまた試みられている、というべきか。そこにはどこか従来型の建築家とは異なる、何かがあるような気がする。20世紀を長く支配しつづけたガラスや鉄、コンクリートの歴史に対するアンチテーゼもわき上がってきているのだろうか。若い世代の人たちの同時代性あるいは相似性というべきものが、その根底にあるのかもしれない。いつの時代にもみられることかもしれないけれど、その論理と成果を確認するには、さらなる20年の時間が必要なのか。確かにここには何か新しいことが起こっている気配を感じさせられているのだが。

← to be continued

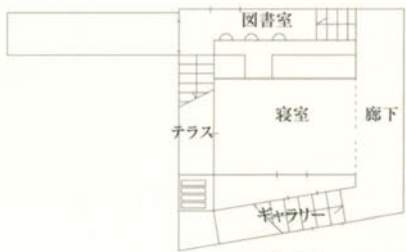
1/200



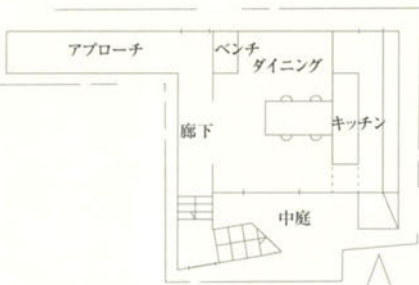
塔屋



3F

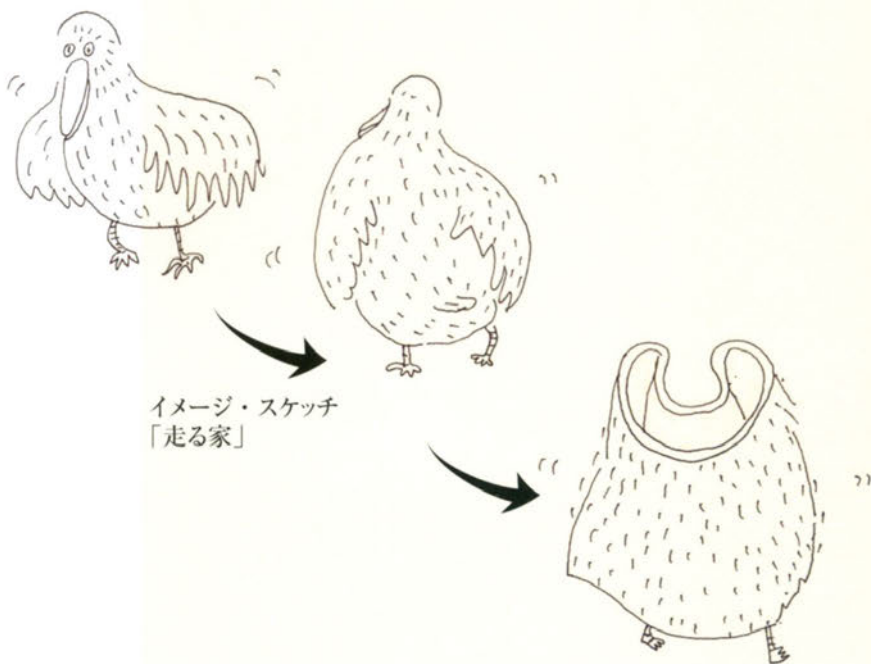


2F



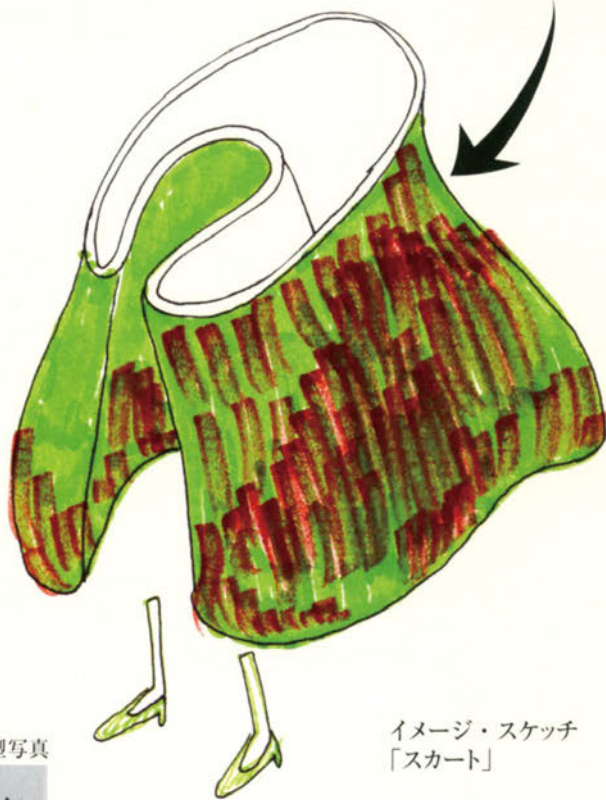
1F

weekend house in Sengataki



イメージ・スケッチ
「走る家」

「時間とともに鉄板の屋根はスギ板葺き。その変化が期待値としてあるか。」



イメージ・スケッチ
「スカート」

森のなかに住む動物のように、あるいは毛皮をまとって森のなかにたたずんでいるように、というイメージから入っていたらしい。最終的には4枚の鉄板の自重を利用する形が生まれた。

初期模型写真



最終模型写真



「二重螺旋の家」

Double Helix House

最新模型。旗竿敷地の路地状のアプローチがそのまま螺旋状に巻きつく住宅。中心の白いキューブは、日常のおもな居室。螺旋状のチューブは、廊下、ギャラリー、図書室、ダイニングなどの小さいけれど多様な場所となる。チューブの上もテラスとして歩くことができるので、全体として「二重螺旋」となっている。



構造模型。鉄筋コンクリート造・3階建て。

建築概要

所在地	東京都台東区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	大西麻貴+百田有希/ o+h architecture office
構造	新谷真人、中島敦広/オーク構造設計
監修	矢作昌生/矢作昌生建築設計事務所
施工	工藤工務店
構造 規模	鉄筋コンクリート造 地上3階建て
敷地面積	74.30㎡
建築面積	41.36㎡
延床面積	91.22㎡
設計期間	2009年4月~
竣工予定	2011年2月



インタビューはふたりの事務所で行った(この後、引っ越しをしたそう)。左が大西麻貴さん、右が百田有希さん。

おおにし・まき/1983年愛知県生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。08年東京大学大学院修士課程修了。現在、同大学院博士課程藤井明研究室在籍。大西麻貴+百田有希共同主宰。ひやくだ・ゆうき/1982年兵庫県生まれ。2006年京都大学工学部建築学科卒業。08年同大学院修士課程修了。現在、大西麻貴+百田有希共同主宰。伊東豊雄建築設計事務所。

おもな作品「地層のフォリ」(共同設計・09)。

Interview with Onishi Maki + Hyakuda Yuki

「旅のバスルーム」なら船もありだ。ということ。今回は北欧のフィンランドやスウェーデン、エストニアなどの主要都市を結ぶバルト海の大型客船。何隻もあるが、これは「ヨーロッパ号」。私はフィンランドの古都トウルクからスウェーデンのストックホルムまで1泊だけのクルーズングをしたが白夜の季節だったので長く感じた。

この船は全長202m、全幅32m、総トン数は5万9912トン。巡航速度は21.5ノット。デッキは13層もあり、高さがある。乗客用リフトは数えると7基。キャビン（客室）数は1152室、乗客数は3013人、乗用車は340台。船内にはなんでも揃っていて、映画やコンサートができる劇場、5つのレストラン、バーは3つ、ナイトクラブ、ディスコ、バブ、カジノ、タックスフリーの店を含めてショップは4、会議室やサウナ、ビューティサロンもある。つまり街のような超高層複合ホテル建築の横倒しほどのボリューム。日本の大型フェリーにもほぼ同規模のものがあり、エーゲ海やカリブ海にはもっと大きな豪華客船がある。

大きな船の機装をしてみるとわかるが、鋼板でできているため全体平面図は建築物のように黒く塗りつぶすところがない。床も水平とは限らない。仕上げ材は軽くなければならぬし、揺れるから家具も固定か固定できることを考えなければならぬ。法も陸上とは異なる。そもそもインテリアデザインというのは船の機装から始まったという説があるくらいなのだ。船のインテリアデザインには大きく2種類ある。船舶らしさを前面に出したものと、まるで陸の大き



霧のなかから静かに現れる船体。

な商業施設のようにデザインしたものである。これは後者。

乗船するターミナルでは、驚くほど多くの遊び着を着た老若男女で混み合っていた。もう食事をしたりワインを傾けている客もいる。乗船するといつの間にか出航していた。

海に面した一般キャビンAタイプ。広いとはいえないが人の動きを考えて各所じつによくできていて、固定のテーブルの両側には、回転してベッドが出てくるソファベッドと壁付きのジャンピング・ベッド。どちらも820mm幅だが片側が壁だから狭さを感じない。この機構がいい。ワードローブは2カ所。ドア同士はもろろ互いにくっついたりしない。金物がいい。

バスルームはシャワーで床が10mmほど下がってなでつけてあるだけなのが、ふつうに使っても水があふれない！洗面カウンターは便器のためにカットしていて反対側の壁に平行ではない。じつくりと20分の一で実測。レターペーパーはレセプションにも備えてなかったが。

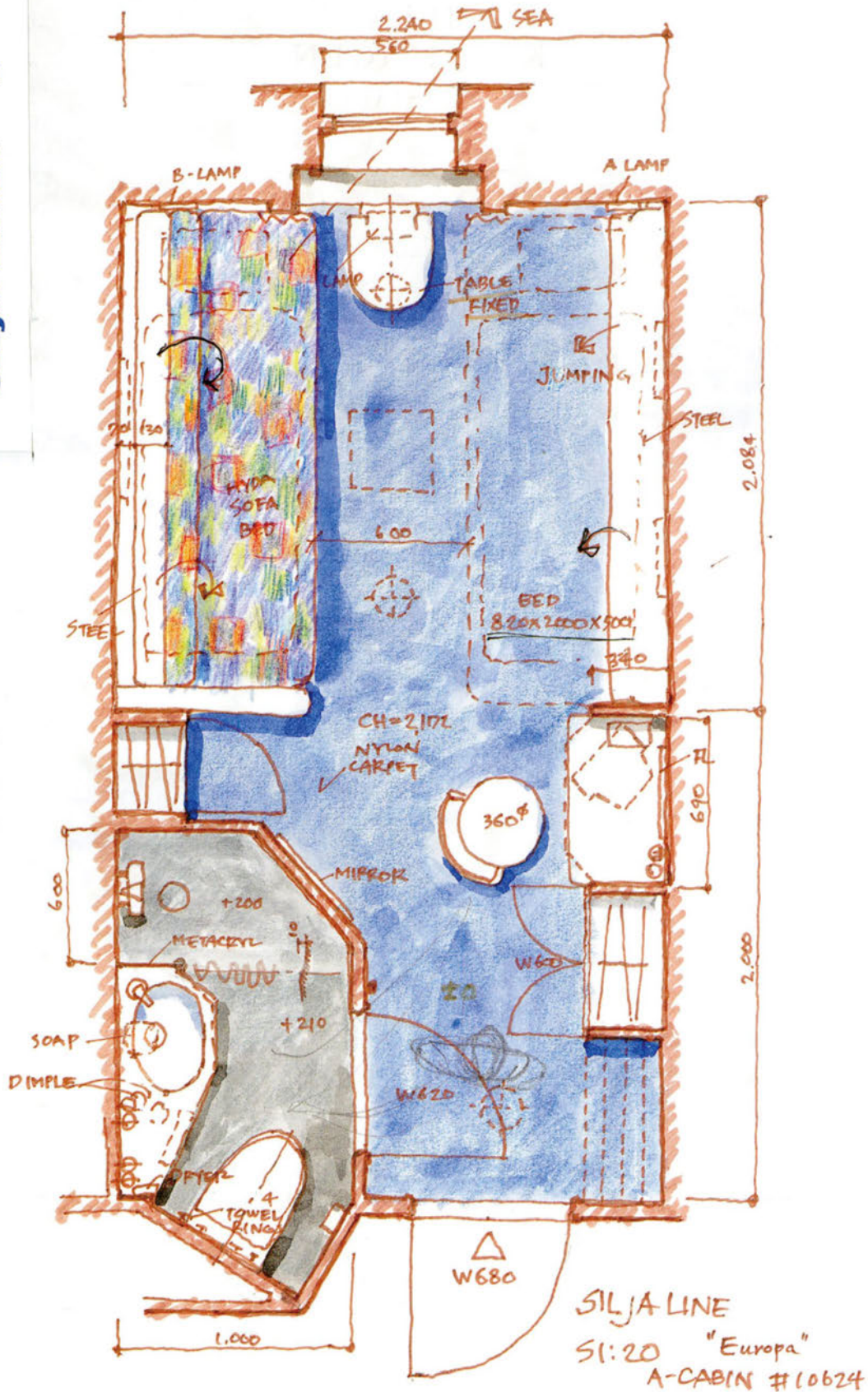
天候が悪く、デッキに出ても霧の中。晴れていれば美しいバルト海のアーキペラゴ（群島）のあいだを静々と進むはずだ。島が突然近くに現れる。これが氷山であればあのタイタニック（*）だ。

ストックホルムに到着。乗客の下船支度はみな速い。マキシムのような優雅なレストランにいてもササツといなくなる。着岸するとすぐたくさんのワーカーがどっと乗り込んできて短時間でベッドメイクをしたり、食材を運び込んだりする。客船の姿を仰ぎ見ると、下船したばかりなのになぜかわくわくしてしまう。あの形は旅情を誘うのだ。

* Titanic: 1912年4月14日、総トン数4万6328tの豪華客船タイタニック号は初めての航海中、氷山に接触して沈没。1517人の犠牲者を出した。その後何度も小説や映画となっている。

キャビンはコンパクト

うら かずや／建築家 インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99年日建スペースデザイン代表取締役。おもな作品＝「ロテル ド ロテル」(88)、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」(91)、「飯綱山荘」(91)、「ホテルモリノ新百合丘」(97)、「メディアージュ」(2000)。著書に『旅はゲートルーム』(東京書籍 光文社)がある。

人の動きをよく計算した不整形平面のバスルーム。

Add / AS Tallink grupp, Sedame 5/7, 10111 Tallinn, Estonia

Tel / +372 640 9800

Fax / +372 640 9810

TALLINK SILJA LINE;
SILJA EUROPA

E-mail / info@tallink.ee

URL / www.tallink.ee

Room Charges / トルクーストックホルム間の夏のハイシーズン、

1キャビンあたりの料金(昼便、夜便とも)

DELUX:211~351€ A:135~226€ B:100~167€ B2:90~150€ C:85~142€

1€=110.03円(2010年12月22日現在)

垂直でも

1 / 軽井沢の森の中。小さな溪流のほとりに立つ黒い家。家らしい形をしているのだが、なんだか森の中の現代彫刻のようにも見える。特徴のあるようなないような静かな形。この家の輝きはすべて家の中に封じ込められていた。

House in a Forest

「森のなかの住宅」設計 / 長谷川 豪

Hasegawa Go × Fujimori Terunobu



水平でもない

現代
住宅
併走

文／藤森照信

連載 第十五回

Text by Fujimori Terumobu. Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二

何

年ぶりだろうか。デビュー作の新鮮さ。を味わった。デビュー作には作家のすべてが含まれるともいうが、確かに、安藤忠雄さん、伊東豊雄さん、石山修武さんなど同世代のデビュー作を思い浮かべてもそれはいえる。

なかでは軽井沢の小さな落水荘。このプロジェクトを知ったのは5年前のSDレビュウのときだったが、家形の主室の上にある空間がなんのためかわからなかった。人が歩けるほどの高さをもつが、斜めだから屋根裏として使うわけにもいかないし、環境制御の天井裏としてはデカすぎるし。

とちよつと反省し、中に入り、家形の室内の斜めに傾いた天井面から透けてにじみ落ちるほのかな光に新鮮さを感じるものの、意味は理解できず、台所にまわって、流し台の前に立ち、流し台の上にあいた四角な穴（開口部）から主室を眺め、「妹高和世の『梅林の家』（2003）もこんなだったナ」と思いながら、視線を斜め上にもち上げてタマゲタ。

初体験。こんな建築空間はこれまでの長い建築探偵稼業のなかでも味わったことがない。大きな天井裏の空間が自分の頭上から斜め上方前方へとスーと延びて、梢の木の葉に縁取られた軽井沢の夏の空へとそのままの勢いで抜けていく。

「ホー」久しぶりに声が出る。「喜んでくれたのは藤森さんが初めてです」



2 3 / 台所に立って、部屋と、天井裏とを眺めたときの驚きの光景。この光景のために、この家につくられたともいえる。不思議な断面図の意味は、ここに立って初めてわかる。外観を真っ黒くした理由も初めてわかる。来訪者にここで最初の光を感じてもらいためだろうか。4 / 浴室。



台所を出て、急な階段を上るときにまた初体験。斜めの天井裏空間を左手に見ながら上ることになるのだが、ふつう屋根裏や天井裏に向かうときは狭くて暗いほうに進むのに、ここは反対で、より広くて明るい光のなかへと上昇していく印象。抜け出て、屋根に出ると、そこは小さな展望台。青空を透かして、夏の終わりの緑が広がる。

出づについてうかがうと、東京工業大学の塚本由晴研究室を出て、西沢大良の事務所に入り、この仕事で独立したという。
うか、大良のところか。納得。家形はこのシリース西沢大良の「諏訪のハウス」(1999・「TOTO通信」2010年新春号)で承知しているし、天井面からの光の感じも同じ。でも、大良と違いプ



Hasegawa Go x Fujimori Terunobu

6 5

現代住宅
併走



5/階段を上って2階の高さの展望台に上がる。白っぽい階段室を、身によじり、抜けるようにして上るのだが、光の筒のなかを上昇する感じが心地よい。6/その途中左手に、天井裏の光景がパツカリと口をあけている。師の西沢大良といい、弟子の長谷川豪といい、不思議な。光意識の所有者である。7/途中の小さな開口部からの居室光景。

8 9 / この光景を写真
で見て、ライトの落水荘
を連想した。水の流れが
家の下を通っているとイ
メージした。

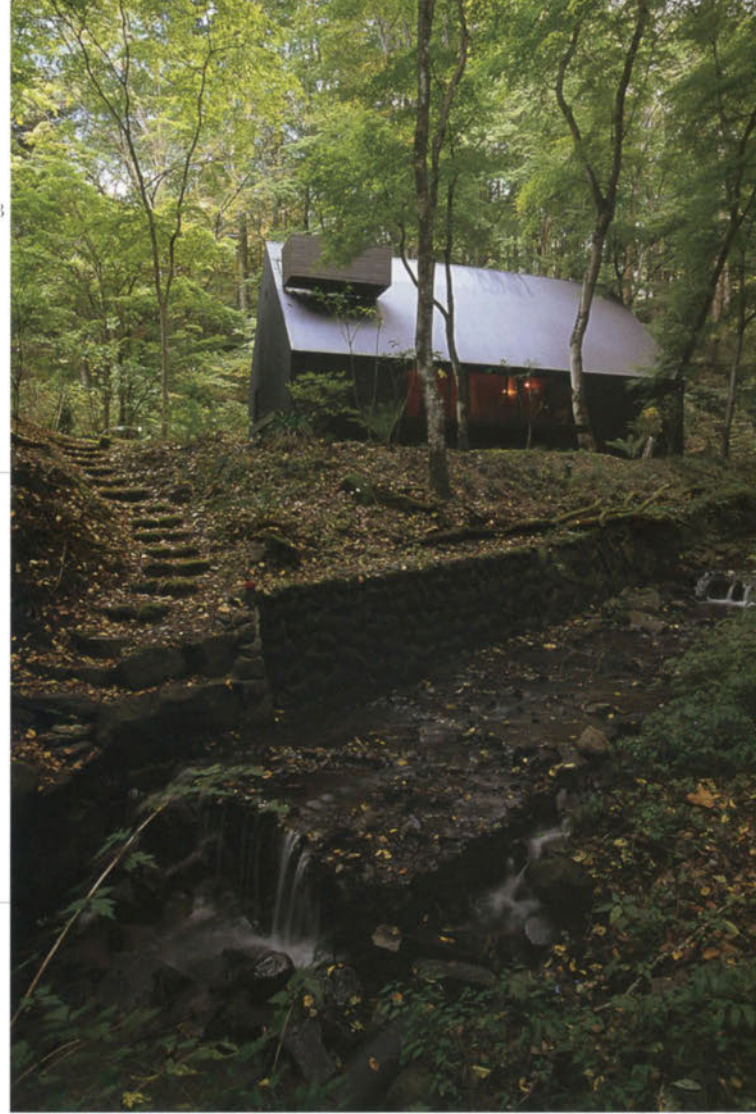
ールの底にもぐつてから上を眺め
たようなへんな自閉感はない。

この点をたずねた。

「西沢大良さんは上からの光が
一番の関心事なのは事務所の頃から
よく知っていました。でも、私は
上からよりは斜め上からの光に関
心がある」

この発言も初体験。5世紀のキ
リスト教建築成立この方、光とい
えば上方からと決まっていた。20
世紀建築もそう。上から差し込む
神の光と、窓から入る日常の明か
りのふたつが、人の味わう光。人
の視線からいうと、上の光のなか
には聖なるものがおわし、窓の向
こうの明るさのなかには人々がい
る。

光と光のなかの光景にはこのふ
たつしかないと思っていたのに、



聖でも俗でもない斜め上方からの
光と、斜め上方に広がる光景に関
心がある、というのである。

唐突に屋根に突き出す物見台も、
斜め上方への視線のための台には
かならず、他人にはどうでもよく
ても自分には不可欠の装置だった



10

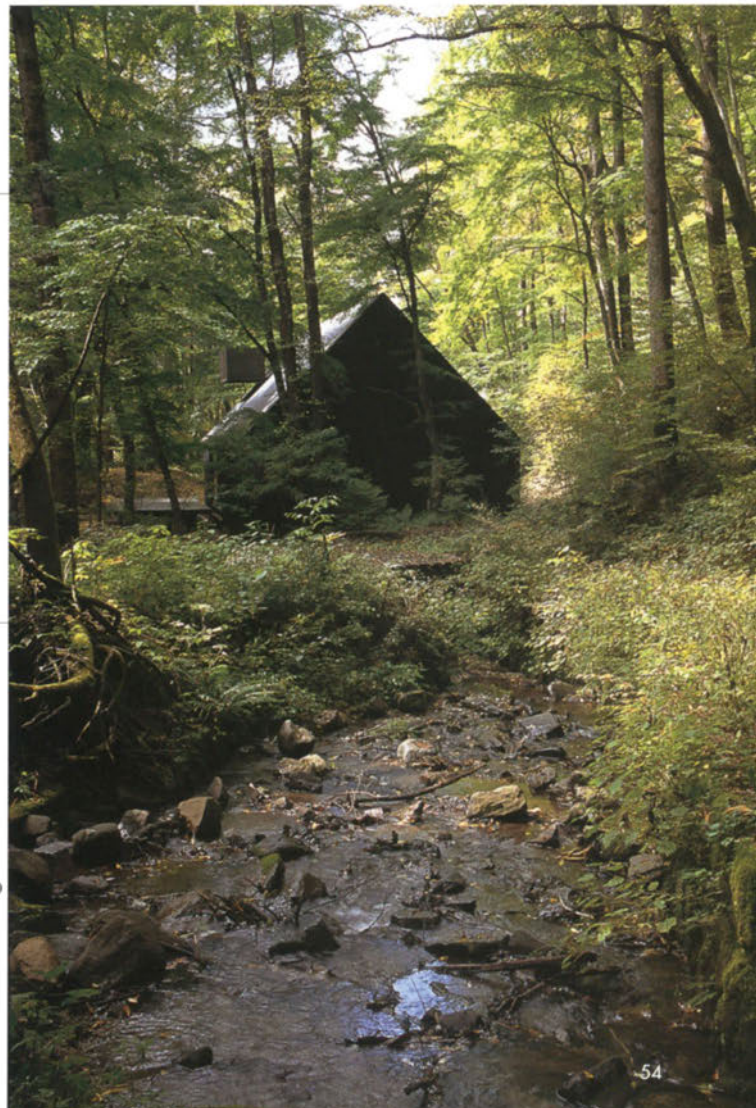
という。

現代の若い世代の傾向として、
はつきりしない空間への敏感さが
指摘できるだろう。目でも見、手
で触ることができる可視可触の実
体的な物でも、物の存在があたり
に必然的に産み落とす空間でもな
く、実体性を希釈した物があたり
にはのかに漂わず空間の質への強
い意識。わかりやすい例でいうと、
壁が生む内と外のふたつの空間で
はない、内でもなく外でもなく、
その両方のような空間とか、内と
外の反転した空間とか。

そ

うした言葉で説明しな
いとわかりにくい空間
の先端を拓いているの
が今の日本の若い世代である、と
私はにらんでいるが、長谷川豪の
探究は、垂直でも水平でもない斜

10 / 光の筒を抜けると、
展望台に出る。文字通り
の台である。抽象性の強
い空間の実験だけでなく、
こうした具体的な装置と
いうか物というか、そ
うした実験をしているとこ
ろがうれしい。



建築概要

所在地	長野県北佐久郡軽井沢町
主要用途	専用住宅
設計	長谷川 豪
構造設計	金箱構造設計事務所
施工	木内工務店
敷地面積	1,049.99㎡
建築面積	85.59㎡
延床面積	89.75㎡
階数	地上1階
構造	木造
設計期間	2005年1月～8月
施工期間	2005年9月～2006年1月
図面提供	長谷川豪建築設計事務所



長谷川 豪

Hasegawa Go

はせがわ ごう/1977年埼玉県生まれ。東京工業大学に入り、塚本由晴研究室で学び、2002年に同大学大学院を終え、西沢大良建築設計事務所に入る。05年〈森のなかの住宅〉の設計を機に独立。斜め上方や背丈に少し足りない高さや高すぎる高さといった独特な空間領域に敏感で、建築作品に「狛江の住宅」(09)や、「新宿山計画」(10)がある。現在、33歳だから、日本の建築界の最若手世代で、21世紀後半の建築を目撃する羽目になるだろう。

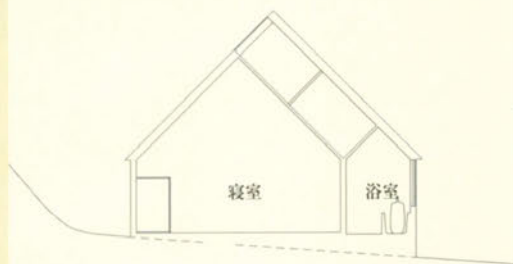
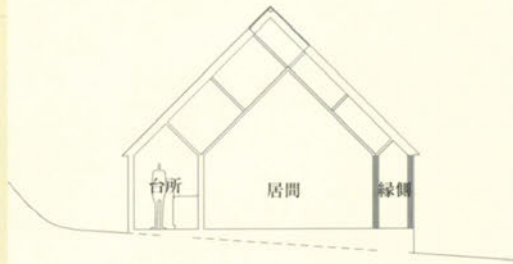
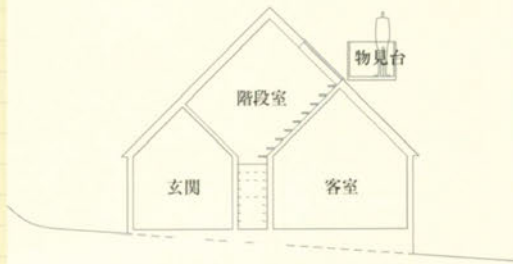
藤森照信

Fujimori Terunobu

ふじもり てるのぶ/建築史家。工学院大学工学部建築学科教授。建築家。著書に「明治の東京計画」(岩波書店 毎日出版文化賞)、「建築探偵の冒険 東京篇」(筑摩書房 日本デザイン文化賞 サントリー学芸賞)、「藤森照信の原 現代住宅再見(1~3)」(TO TO出版)。建築作品に「神長官守矢史料館」(1991)、「タンポポ ハウス」(95)、「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(97 日本芸術大賞)、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000 日本建築学会作品賞)などがある。

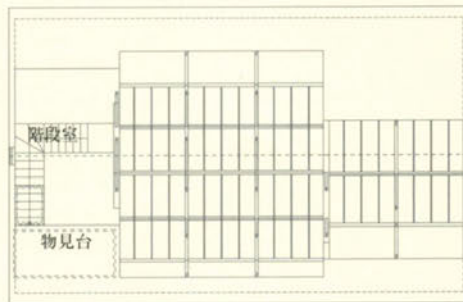


[断面図]

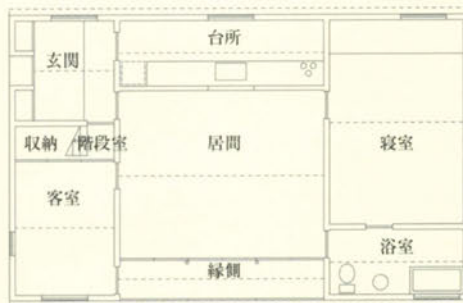


1/200
0 1 2m

[平面図]



小屋裏



1階

1/200
0 1 2m

め上方の空間。こういうひとつのテーマで新しい建築全体が出現するわけではない。新しいものが生まれるときには、急に全体が誕生したりせず、3つの段階を経ると、建築史家としての私は、19世紀の歴史主義から20世紀のモダニズムへの変化の過程を観察するなかで知った。まず、欠落が起こる。大事な要素の欠落は、表現上でヘンなものを生む。次に、過剰が起こる。ひとつ要素の過剰は、機能上で困ったものを生む。こうした欠落と過剰を

不可欠な過程としてくぐり抜けた後、ちゃんとした建築全体が出現する。
斜め上方へのコンシヤスは、新しいひとつのテーマだろう。こういうひとつのテーマをデビュー作で顕示できるのは強みにちがいない。ひとつあれば、ひとつがふたつ、ふたつが4つ、増殖を重ねて、後にはなんとかなるだろう。
斜め上方なんていうめずらしいテーマがどうして生まれてきたのか、この点を聞くと、「身体感覚を

拡張したかった。家形をとるのも、身体感覚の拡張に合うからです」。確かに、上と水平に加え斜めが入れば、四方八方への動きが可能になり、ひとつの方向への動きというより、空間の身体感覚が膨れる感じになる。家形は、四角よりは球に近い分、スムーズに膨れることができる。
そう考えて気づいたが、木の骨組みの外側に1枚、内側に1枚、風船のような薄い皮膜をブーツと膨らませてつくったように見える。森のなかの風船の家。

広島県産材で 新しい価値観の木造住宅を つくりつづける

代表取締役社長

山根恒弘 さん

山根木材の創業は明治43（1910）年。2010年に、創業100年を迎えた。名前のとおり、木材事業を手がけていた会社が建設業に本格的に参入したのは、3代目社長の山根恒弘さんが陣頭指揮をとったこと。ちょうど山陽新幹線の工事が始まる頃、というから、まさに高度成長期の波にのって、会社を引っ張ってきたといえるだろう。およそ半世紀のあいだに、グループ会社まで含めて社

員2000名以上、年商100億円を超す、県内トップクラスのビルダーへと会社を育て上げた。そこには、「木」への変わらぬ思いと、時代を冷静に見つめるまなざしがある。

現代の
「木の目利き」に
求められるもの

「柱の価値が、ずいぶん変わってしまいましたね」と山根さんが目

で追うのは、山根木材のモデルハウス「山ふくじゅ」で採用されている柱。檜の集成4寸角。「昔は柱の美しさは木の美しさでした。節がないほうがいい、目は詰んでるほうがいい、というのがあたりまえ。山のほうでも、そういう木を育てるために時期を選んで枝を打ったりしたものです。ところが今は、むしろ節があったほうが木らしくていい、というお客さままでいます」



山根恒弘（やまね つねひろ）/1942年広島県生まれ。65年広島大学工学部経営工学科卒業。松下電工勤務の後、70年山根木材入社。82年専務取締役を経て、85年より現職、現在に至る。創業100年を迎え、今後も地元広島産の木を活かした住宅をつくりつづけることにこだわっている。

Yamane-mokuzai Yamane Tsunehiro

写真上/社長の山根恒弘さん。商工センター住宅展示場「エコス」山根木材モデルハウス「山ふくじゅ」にて。下/右から、玄関アプローチと縁側、和室、LDK、洗面室（いずれも「山ふくじゅ」）。主要構造材すべてに県産材を使うこの家では、落ち着いた和の空間のなかに、新しいライフスタイルの提案が数多く盛り込まれている。





Housing Company

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

Data



Yamane-mokuzai

山根木材株
本社所在地
広島県広島市
南区出島1-21-15
電話
082(254)3234
代表取締役社長
山根恒弘
創業
1910年
会社設立
1951年
従業員数
200名
事業内容
住宅事業、
住宅販売事業、
設計事業、
木材事業
売上高
70億5400万円
(2010年1月期)
関連会社
ヤマネウッドイ-
リファーム、
ヤマネホーム
サポート&アセット
URL
www.yamane-m.co.jp/
商工センター
住宅展示場「エコス」
「山ふくじゅ」の
TOTO使用機器
洗面所
洗面器L980

写真上／「山ふくじゅ」正面外観。下／LDK前の縁側。大開口のLDKは、縁側を経て、外部空間とつながっている。



昔からの木の美しさは、今でももちろんある。柾目の美しい板材が高価なものも変わらない。だが社会は、そこに価値を見出さなくなりつつある。「木材」を社名に冠する身としては、忸怩たる思いもあるだろう。しかしあえて伝統的な木の文化に固執せず、新しい流れ、新しい木の使い方、新しい住宅像を追い求める。その結果として、集材材も使うし、数年前からは金物工法も取り入れた。自分たちは文化財を扱っているのではない、お客さまが日常を過ごす住宅をつくっている。使命感にも似た、そんな気概に満ちている。

「長期優良住宅など、これからは住宅の長寿命化が求められます。そのためには強い構造体がいる。集材材は強度にばらつきがないから性能を担保できます。金物を使うのも同じ理由です。住宅は、木の美しさを求めた世界から強度を求める世界へ移ってきています」

現代の「木の目利き」には、板目の見方などより、ヤング係数や乾燥率の把握が求められる。上下階の柱の位置を揃える「MOKUキユープ工法」の発想も、構造体

としての強さを求めた結果だ。「木」にこだわるのではなく、「木の家」に思いがある。

木を伐って使ってこそ山が息を吹き返す

南斜面の木は南の柱に。木は、生えていた方角で使え、とは古くからいわれることだ。木の特性を熟知した先人たちの知恵である。それを少しマクロにみれば、「広島の家には広島の木を使う」意味がわかる。考えればあたりまえのこと。北海道の木を沖縄で育てるのは難しい。山根木材は、県産材にこだわる。

「環境問題がクローズアップされて、みなさん自然を守れ、木を植えろとおっしゃるが、山の木を伐って、使ってこそ山が育つんです。伐った木をきちんと使って、そのあいだにまた木を育てるという流れをうまく循環させることが、持続型社会の基礎だと思っております」

山根さんは、これを「活樹」と呼ぶ。木を伐る＝山を減らす、という発想ではなく「木を活かす」ことが大切。活かして使わな

ら循環がうまくいかず、山が停滞するのであって、たくさん使うことで流れができる。じつは集材材を使うのも、その環。手入れの行き届かない木は、樹齢を重ねても建築材料に向かないものが多く出る。それをできるだけ無駄なく使うには、チップにして集材材にしたほうがロスが少ない。

「ここ、柱も天井もみんな木が見えているでしょう。こういうつくり方をすると、職人たちの誠実さが伝わるんですよ。そうやって一生懸命つくった家を、メンテナンスして、リフォームして、長く住んでいただきたい。私たちは、それらをセットでサポートできる会社でありたいと思っています」

節があってもいい、という新しい価値観にも受け入れられるデザインを模索し、さまざまな提案が続く。だが活動の基本は変わらない。地元の木を使うこと、しっかりと構造体の家をつくること、メンテナンスやリフォームにもきちんと取り組むこと。

環境問題も、住宅の長寿命化も追い風にして、山根木材の次の100年が始まった。

取材 文／市川幹朗 写真／川辺明伸



GLOBAL ENDS

towards the beginning



ショー ン ゴッドセルによる「RMITデザイン
ハブ」ファサード原寸大模型 (左)、ケリー
ヒルによる「ITC Sonar Bangla」の一連の
模型 (中央)、パウロ ダヴィッドによる「カ
ーサ ダス ムーダス芸術センター」模型 (右)。



中庭展示

屋外に設けられた大型スクリーンに「言葉」
が浮遊する、抽象的な空間が出現。

「ギャラリー・間」から「TOTOギャラリー・間」へ

TOTO株式会社の文化活動の環として1985年に発足したギャラリー・間は、昨年10月に創設25周年を迎えました。ギャラリー・間は、人間・時間・空間それぞれの間合いという日本特有の概念を表象して命名されました。第1回の「Frank O. Gehry展」以来、これまで国内外の建築・デザインの個展を中心に通算134回の展覧会を開催し、延べ76万人を超える来場者を迎えてきました。

創設25周年を機に、「ギャラリー・間」の名称を、「TOTOギャラリー・間」に改称しました。これはTOTO株式会社というひとつの企業が経済活動と共に、文化的に社会と接点をもつ活動を今後も継続し、さらに発展していくことの大切さを、日本のみならず世界へ発信していくメッセージでもあります。

TOTOギャラリー・間の企画は、「TOTOギャラリー・間運営委員会」にて審議・決定していきます。これまでギャラリー・間運営委員は、発足から25年間の長きにわたり、故田中光氏（2002年没）、安藤忠雄氏、川上元美氏、黒川雅之氏、杉本貴志氏に務めていただきましたが、このたび新たに「TOTOギャラリー・間運営委員会」として、岸和郎氏（建築家、京都大学大学院教授）、内藤廣氏（建築家、東京大学大学院教授）、原研哉氏（グラフィックデザイナー）、武蔵野美術大学教授）、吉岡徳仁氏（デザイナー）をお迎えし、安藤忠雄氏には特別顧問にご就任いただきました。今後、この新運営委員会によって、次なるステージの企画をお届けします。



ケリー・ヒル
シンガポール

Kerry Hill

photo: Justin Hill



石上純也
日本

Junya Ishigami

photo: Kenshu Shintsubo



トム クンディグ
アメリカ

Tom Kundig

photo: Tim Bies



スミルハン ラディック
チリ

Smiljan Radic

会期／～2月26日(土)



次回予告

五十嵐 淳展

— 状態の構築

会期 4月8日(金)～
6月18日(土)
講演会 4月21日(木) 18:30～20:30
会場 津田ホール
参加方法 事前申し込み制
*詳細はTOTOギャラリー 間
ウェブサイトをご覧ください。

TOTO
ギャラリー・
間

所在地 東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3階
電話 03(3402)1010
ファクス 03(3423)4085
開館時間 11:00～18:00
(金曜日のみ19:00まで)
休館日 日曜日 月曜日 祝日
入場料 無料

アクセス ▶ 東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車
3番出口徒歩1分
▶ 都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車
7番出口徒歩6分
▶ 東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車徒歩7分
▶ 東京メトロ銀座線
半蔵門線
都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
徒歩7分


www.toto.co.jp/gallerma/

「GLOBAL ENDS (世界の果て)」に立つ7組の建築家による、自身の精神と現在形を表明する大きな模型、「GLOBAL ENDS」から想起される自国の言葉を具現化する小さなオブジェ、自身の活動を紹介するショートムービーとパネルを展示。彼らのデザインローカルな標準を並置することで、その建築家特有の豊かな特徴が浮かび上がります。またギャラリーの中庭では、近現代の識者によって書かれ、あるいは語られてきた言葉と文章、そしてTOTOギャラリー 間のこれまでの出展者達に投げかけた質問に対する回答が投影され、この新たに姿を現しつつある建築文化の概念的な理解をうながします。



第2展示室

手前は、トム クンディグの展示「Hot Rod」。その他、奥に向かって、スミルハン ラディック、石上純也、RCR アランダ ビジェム ヴィラルタ アーキテクトの展示。



第1展示室

「GLOBAL ENDS」から生まれる、新たな価値観

新運営委員会による初の展覧会企画として、25周年記念展「GLOBAL ENDS — towards the beginning」を昨年11月19日から開催しています。本展では、ゲストキュレーターとして建築史家・ワシントン大学准教授のケン・タダシ・オオシマ氏を迎え、世界の7カ国——東京、メルボルン（オーストラリア）、マデイラ島（ポルトガル）、サンティアゴ（チリ）、シアトル（アメリカ）、シンガポール、オロツト（スペイン）——から7組の建築家を招きました。彼らは、均質的なグローバルイズムの潮流に与ることなく、それぞれの地域や文化、風土に根ざしながら設計活動を展開する建築家たちです。本展のタイトルには、「世界の果て（GLOBAL ENDS）」にこそ何が潜んでおり、そこから多様な新たな価値観が生まれてくる、という期待が込められています。「GLOBAL ENDS」は、まさに、ここから世界につながり、広がっていく「触手・先端」を意味しているのです。

時代はモダニズムが実現した均 性から脱却し、多様な価値の存在を探し出し、その意味を問うことを求めています。本展で示そうとする「GLOBAL ENDS」の価値とはどのようなものなのか。そして、それは世界に対してどのような強度をもち、影響を与えうるのか。本企画を通して、21世紀を切り拓く、新しい建築文化の価値観を提示することができれば幸いです。

↓ 出展建築家



パウロ ダヴィッド
ポルトガル
Paulo David



ショーン・ゴッドセル
オーストラリア
Sean Godsell



RCR アランダ ビジェム・
ヴィラルタ アーキテクト
スペイン
RCR Aranda Pigem Vilalta Arquitectes

photo: Alma Mollemans

photo: Earl Carter

photo: RCR

取材 文/大山直美
写真/傍島利浩
(酒井良仁さんの
ポートレートをのぞく)

東急キャピトルタワー

良質な空気をつくり出す

東京・永田町のキャピトル東急ホテル
といえば、各国の著名人に愛された名門
ホテル。古くは魯山人が美食をきわめた
高級料亭「星岡茶寮」があった由緒ある
土地に立ち、内装には吉田五十八や剣持
勇もかかわっていたという。

老朽化による建て替えのため、200
6年11月末で43年間の営業を終了した同
ホテルの跡地に、このほど新ホテル「ザ
・キャピトルホテル東急」を核とした地

上29階、地下4階建ての高層複合ビル「東
急キャピトルタワー」が誕生した。おも
なフロア構成は4〜13階がオフィス、16
〜17階が賃貸住宅、18〜29階と5階の
部がホテル客室。地下2階は東京メトロ
溜池山王駅・国会議事堂前駅に直結して
いる。デザインアーキテクトに隈研吾氏
を起用、設計は永田町一丁目計画東急設
計コンサルタント・観光企画設計社設計
共同企業体。

東京急行電鉄の西澤信一さんによれば、
今回のプロジェクトを貫くコンセプトは
芭蕉にあやかった「不易流行」の精神。
「残すべき伝統や文化を大切にしながら、
新たに変化、進化していくことも大事。
過去と未来は別ものではなく、ひとつの
ものとしてつながっていないではならな
いんです」と語る。そのため、全体に和
を取り入れつつも装飾に傾きすぎず、内
と外の 体感がある空間を目指したとい

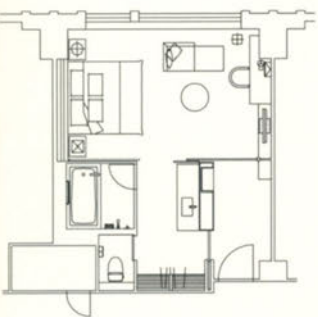
う。
ホテルの設計を担当した観光企画設計
社の若本俊幸さんも、「あまりインテリア
が主張しすぎず、壁で隔てるのではなく
庭と 体化した透けた空間にしたかった」
と振り返る。客室のバスルームについて
も、浴槽・便器・洗面器が川の字に並ん
だ以前のプランから半世紀後、どう新し
さを取り入れるかに腐心し、たとえ開口
部に面したビューバスが実現できない部

南東側から見た
東急キャピトルタワー全景。



デラックスキング

Deluxe King



1/200 0 1 2m

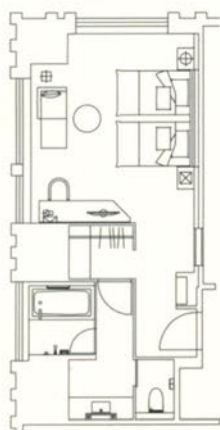
写真上/入り口から見たところ。正面は可動の障子。奥がベッドルーム。手前左手にバスルーム。中/障子をバスルーム側に寄せたところ。下/独立したトイレ。



プレミアコーナーツイン

Premier CornerTwin

写真上/コーナー2方向に窓のある57㎡のプレミアコーナーツイン。下/ビューバス。レインシャワーは全バスルームに備えられている。



1/200 0 1 2m





写真上／障子を開け放てばバスルームから外の景色が眺められる。下／45㎡のスタンダードなデラックスキング室内。左にガラス張りのバスルーム、障子を閉めれば落ち着いた寝室空間に変わる。



ローマンシェードを開ければ、眼下に国会議事堂などが見える。





写真上/窓に面し、豊かな緑と自然光が目に飛び込んでくる洗面コーナー。



女子トイレ

写真上/眼下に日枝神社を見下ろすパウダーコーナー。柱に鏡が設置されている。奥は歯磨きコーナー。



写真上/入り口方向から見たトイレブース。下/見返し。ドアの開きが15度となるように設定されている。



多機能トイレ

写真左右/男女別にし、誰にでも使いやすいように男女各トイレ内に設置された多機能トイレ。ここのみ扉は引き戸になっている。



間仕切り障子 越しの バスルーム

屋であっても、外光が感じられるバスルームをつくりたいと考えたとのこと。
ちなみに、このタワーの足元に広がる緑のポリュームは都心では破格で、敷地の西には日枝神社の豊かな柱が広がり、この緑と連続するように庭を設け、神社の参拝客や地域住民にも開放した散策路も確保してあるため、どこが敷地境界線かわからないほど。さらに、ホテルは6mスパンの大開口を実現したため、内外の体感温度は格段に高まっている。

さっそく、まずはホテル客室を見学した。今回撮影したのは19階の2室で、いわゆる標準タイプでキングベッドを備えた「デラックスキング」(45㎡)と、セミダブルベッド2台を備えた「プレミアアコナーツイン」(57㎡)のうち、窓に面した浴室のある角部屋。

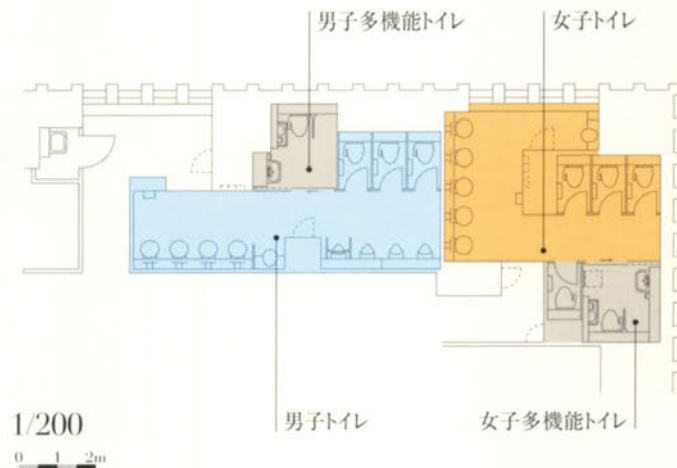
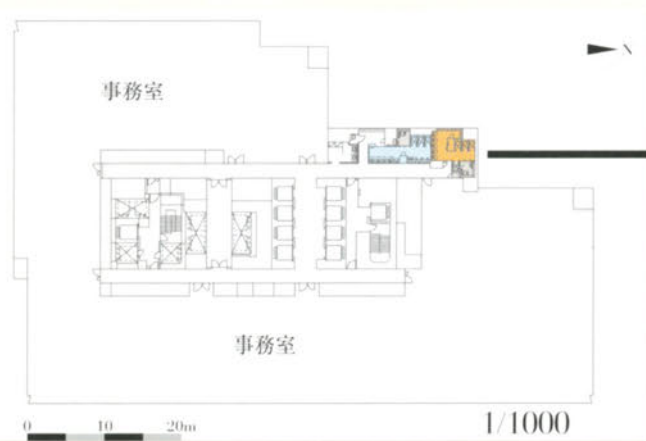
後者のゆとりやバスルームの眺めもさることながら、印象的だったのは標準タイプとは思えないほど充実した前者のプラン。ポイントはその空間を巧みに仕切ったりつないだりできる間仕切りの障子にある。障子は窓ぎわのベッドルームと手前の水まわりのあいだに建て込んであり、ガラス張りの浴室やドレッシングコーナーの目隠しとして活用したり、反対側に引き寄せれば、入り口前のスペースを独立した玄関のように使うこともできる。入室時にはドアを開け、さらに障子を開けると、正面のワイドな開口部から光が

奥右手が入り口。入って最初のブースが多機能トイレ。仕様は男女共通。小便器も洗面カウンターも清掃がしやすい壁掛けタイプ。



男子トイレ

写真上／男子トイレ内の窓に面したコーナー。自然光にあふれ、四季折々の表情が目に入る息抜きコーナー。下／ブース内。



降り注ぎ、眼前の国会議事堂が目飛び込んでくるという寸法だ。
 バスルームも窓に面してはいないが、ベッドルーム越しに景色が眺められ、開放感十分。外光が入ることを計算して、仕上げ材にあえて濃い色を選んだという若本さんの言葉どおり、黒いタイル張りの室内は決して暗くはなく、むしろ上質な印象を醸し出している。スリーインワン方式をやめてトイレは独立させる。方浴室と洗面所とのあいだはガラスで仕切ったので、いっそう広がりを感じられる。
 設備面では、全室にレインシャワーを備えたのも見どころ。誤って水を浴びることがないように、操作盤の配置にも気を配ったと西澤さんは言う。「われわれの仕事は空間ではなく、空気をつくることだとよくみなに話します。いくらすばらしい空間をつくっても、サービスが行き届かない点がひとつあるだけで、すべての空気はぶちこわしですから」

自然光と緑を取り入れた トイレの 展望コーナー

次に、オフィス基準階のトイレを見学した。各階のトイレは北西角の1カ所所あり、撮影したのは11階の男女トイレ。設計を担当した東急設計コンサルタントの酒井良仁さんにご案内いただきながら、話を聞いた。

空間の最大の見どころは、建物全体のコンセプトにも通じる外部との連続性。

東急キャピトルタワー

TOKYU CAPITOL TOWER

建築概要

所在地	東京都千代田区永田町2-10-3
主要用途	ホテルおよび関連用途 事務所 共同住宅 店舗
事業主	東京急行電鉄
企画	総合プロデュース 東急急行電鉄 東急ホテルズ
設計監理	永田町二丁目計画 東急設計コンサルタント 観光企画設計社 設計共同企業体
デザイン監修	隈研吾建築都市設計事務所
施工	清水建設 ダイタン(衛生)
敷地面積	7,938.25㎡
建築面積	5,425.92㎡
延床面積	約88,000㎡
用途別面積	ホテルおよび関連施設: 約38,000㎡ 事務所: 約31,000㎡ 共同住宅: 約3,000㎡ 駐車場ほか: 約16,000㎡
構造	鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造
階数	地下4階、地上29階、塔屋3階(呼称 表記上)
設計期間	2005年9月~2008年1月
施工期間	2008年3月~2010年7月

ザ・キャピトルホテル 東急

開業	2010年10月22日
運営	東急ホテルズ
総客室数	251室
URL	www.capitolhoteltokyo.com

オフィス階

基準階専用面積	6~8階: 2,283.69㎡、10~13階: 1,889.69㎡
床荷重	500kg/㎡(一部1,000kg/㎡)

おもなTOTO使用機器

ホテルゲストルーム

バスルーム/ユニットバスルームEBG1819特ほか: いものホーロー浴槽EUJY1601L/RP特 Sシリーズ水栓金具
トイレ/ネオレストD CES9563特 紙巻器YH63#MS
洗面/洗面器L520 Sシリーズ水栓金具

基準階オフィス

女子トイレ/大便器ユニットUTEK23: 大便器CU466P センサースイッチ式FV TES26PE1B+TEF86B+TES23B ウォッシュレットP TCF581M/WR特 棚付二連紙巻器YH60M/洗面器ユニットUTEL67: 壁掛自動洗面器LS800DM特 電気温水器REA03特 クリーンドライTYC411W/ 菌みがきユニットUTEH11: 菌みがき器L595 単水栓TL595AX ボール洗浄給水栓TL595WX
男子トイレ/大便器ユニットUTEK23: 大便器CU466P センサースイッチ式FV TES26PE1B+TEF86B+TES23B ウォッシュレットP TCF581M/WR特 棚付二連紙巻器YH60M/小便器ユニットUTEU31: 壁掛便器US800CE 手すりT114CU2/洗面器ユニットUTEL67: 壁掛自動洗面器LS800DM 特 電気温水器REA03特 クリーンドライTYC411W/ 菌みがきユニットUTEH11: 菌みがき器L595 単水栓 TL595AX ボール洗浄給水栓TL595WX
多機能トイレ/多目的ユニットUTED特: 大便器CU466P センサースイッチ式FV TES26PE1B+TEF86B+TES23B ウォッシュレットP TCF581M/WR特 紙巻器YH51R 壁掛汚物流しSK35フイティングボードYKA40

男女トイレとも入ってまず目に入るのが、窓からの明るい光と緑豊かな景色。酒井さんによれば、当初は開口部のスパンを生かし、緑を存分に見せる共用通路から男女トイレに分かれる案もあったが、用を足す前後に男性と女性の見合いが発生する動線を避けるべく、現在のように男女を完全に分離し、半分ずつ眺めを享受するプランに落ち着いたという。また、多機能トイレを独立して設ける



天井高2,800mm垂れ壁なしで、すっきり広々とした基準階オフィススペース。

さらに見逃せないのは、ブース内に人が入っていないときのドアの開きの角度が15度に固定される点。これはこちらか

のではなく、男子トイレと女子トイレの内部にそれぞれ広めの多機能ブースを設けた点も特筆に値する。男女別のほうが利用する人にとってはうれしいし、あいていけば誰にでも使いやすいメリツトもある。

から提案しました。使用中かどうかひと目でわかるし、ドアの外に表示錠が不要なので、見たためにもスマートでしょう」とは酒井さんの弁。実際に見ると、洗面コーナーの奥に緑が見える女子トイレも心地いいが、廊下から入ると正面に展望コーナーのようなカウンター付きの開口部が広がる男子トイレは、リフレッシュ効果がさらに高い印象だ。オフィスはホテルより下の階にあるため、緑が身近に感じられる。「仕事の合間に緑を眺めつつホッとひと息ついたり、仲間と談笑しているうちにビジネスのヒントが生まれるような場になってくれれば」、酒井さんはそう語ってくれた。



東急設計コンサルタント
建築設計本部
第2設計統括部
リーダー

酒井良仁
Sakai Yoshihito



観光企画設計社
インテリア設計部
理事

若本俊幸
Wakamoto Toshiyuki



東京急行電鉄
都市生活創造本部
渋谷開発事業部
事業計画部
統括部長

西澤信二
Nishizawa Shinji

TOTOの最新情報

TOTO

↓ TOTO news 1

International Sanitary and Heating

今年も『ISH 2011』に出展します



TOTOは今年もドイツ・フランクフルト国際見本市会場で開催される世界最大規模のトレードショー「ISH (International Sanitary and Heating)」に出展します。2009年に日本の水まわり総合メーカーとして初めて出展し、欧州市場進出のスタートを切りました。2度目となる今回の出展では、初回より継続している“CLEAN TECHNOLOGY SINCE 1917”をスローガンに、新



商品展示イメージ。

商品と技術紹介に焦点をあて、さらに広い展示スペースで空間訴求に力を入れています。緑と光あふれる心地よい空間でみなさまをお迎えいたします。

TOTOブース全体イメージ。

↓ TOTO news 2

TOTO・DAIKEN・YKK AP 「グリーンリモデルフェア'10~'11」を 開催いたします

TOTO・DAIKEN・YKK APのコラボレーションによる大規模イベント「グリーンリモデルフェア'10~'11」を、昨年10月より各地で開催中です。

「家がわかると家がカワる」をテーマに、住設機器・内装建材・サッシのトップメーカー3社が総力をあげて、みなさまに新しい生活スタイル、グリーンリモデルを実現するための手段や効果

をご提案いたします。本年2月からは下記2会場にて開催しますので、ぜひお近くの会場に足をお運びいただき、グリーンリモデルをご体感ください。



2010年の名古屋会場での様子。

福岡会場	東京会場
開催日時 2月10日(木)12:00~17:00	開催日時 4月22日(金)12:00~17:00
2月11日(金)10:00~17:00	4月23日(土)10:00~17:00
2月12日(土)10:00~16:00	4月24日(日)10:00~16:00
会場 マリンメッセ福岡	会場 東京ビッグサイト
所在地 福岡市博多区沖浜町7-1	所在地 東京都江東区有明3-11-1

▶ くわしくは re-model.jp/

↓ TOTO news 3

2011年版 TOTOドローイングカレンダーを ご紹介します

今年のカレンダーは、個性的な活動を展開する建築家アレハンドロ・アラヴェナ氏の建築ドローイング集です。氏は、大学や美術館から住宅まで斬新な造形と色彩が印象的な多くの建築作品を手がけ活躍しています。また、建築家自身が施工者となり弱者のための社会基盤の整備に取り組む ELEM-ENTAL は近年の氏の活動の中心として大きな成果をあげています。今回のカレンダーでは、TOTOギャラリー・間での展覧会に先駆けその一部をご紹介します。



プレゼント!

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方の中から、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

*7月には、TOTOギャラリー 間(東京 乃木坂)で日本初の個展を開催。初来日、講演を予定しております。

セラのお知らせ

CERA
TRADING

cera trading news

「nendo」がデザインした
洗面器「ROLL」新発売

「ROLL」は、2010年4月に
行われたミラノサローネで
発表された洗面器で、日本
のデザインオフィスnendo
がデザインを手がけていま
す。
今までの概念であった「洗
面器=水を受けるための器」
ではなく、水と空間の境界
を意識してデザインされた
洗面器で、1枚の紙を用い
てひとつの円をつくったよ
うな形が特徴です。「巻き」
を美しく見せるため、手前

でリムがずれている状態を
陶器で表現、洗面器のフチ
を薄くすることで軽やかさ
も出しています。nendoの
繊細なデザインとイタリア
FLAMINIA社の高い技術
力が生み出した新しいデザ
インの洗面器です。
カタログをご希望の方は、
セラトレーディングホーム
ページ、または電話・ファ
クスにてお申し込みくださ
い。

洗面器 FLRL44L/79,800円(税込)
水栓 CET900R/110,250円(税込)▶ www.cera.co.jp

お詫びと訂正

TOTOの最新情報

TOTO

TOTO news 4

キッズデザイン賞最優秀賞
「少子化対策担当大臣賞」
受賞

第4回キッズデザイン賞^{※1}
にて「ベビーシート^{※2}」「フ
ィットングボード」「ベビ
ーチェア^{※2}」がお子さま連
れ配慮商品として、ソーシ
ャルキッズプロダクツ部門
最優秀賞「少子化対策担当
大臣賞」を受賞しました。
子育て支援の社会インフラ
整備への貢献度と、安全性

と衛生性・メンテナンスの
容易さを同時に満たし、シ
ンプルで小型化に成功した
デザインが評価されたもの
です。



ベビーシート(YKA25)

※1主催 キッズデザイン協議会
※2デザイン監修 東京工業大学 安田幸一教授

TOTO news 5

環境浄化技術ハイドロテクト
第12回グリーン購入大賞
「経済産業大臣賞」受賞

TOTOの光触媒環境浄化技
術「ハイドロテクト」が、
グリーン購入に対するすぐ
れた取り組みを表彰する
第12回グリーン購入大賞[※]
において「環境大臣賞」と
並び最高賞である「経済
産業大臣賞」を受賞しまし
た。ハイドロテクトは太陽の光
や雨といった自然の力で

「空気浄化」や「防汚(セル
フクリーニング)などさま
ざまな効果を発揮し、地球
も暮らしもきれいにする環
境浄化技術です。
審査では、このすぐれた特
徴やハイドロテクトの世界
的な普及促進による地球環
境への貢献といった取り組
みが高く評価されました。

※主催 グリーン購入ネットワーク(GPN)

TOTO news 6

住宅エコポイント対象製品に
「節水型トイレ」と
「高断熱浴槽」が加わりました

トイレでは「ネオレスト」
など洗浄水量6.5L以下の製
品が、浴槽では「サザナ」
など“魔法びん浴槽”機能
搭載の製品が対象です。ポ
イント取得にはエコリフォ
ーム ①窓の断熱改修、ま
たは②外壁、屋根・天井ま

たは床の断熱改修)とあわ
せて実施することが必要で
す。

くわしくは [http://www.toto.co.jp/
products/ecopoint/](http://www.toto.co.jp/products/ecopoint/)
TOTO住宅エコポイント相談室
0120(10)0035
受付時間/9:00~17:00
(夏期休暇 年末年始をのぞく)

▶ www.toto.co.jp

前号 49 ページ藤森語録「決定的な建築」の投入堂の所在地が間違っておりま
した。正しくは鳥根ではなく鳥取です。ここに訂正してお詫び申し上げます。

TOTO出版のお知らせ

TOTO出版

book 3

book 2

book 1



建築に内在する言葉

本書は東京工業大学名誉教授・坂本一成氏の40年にわたる研究と設計活動における思考の過程を綴った論考集です。建築を、その構成要素や空間概念から、さらにはビジュアルとしての図像性といった側面から多角的に分析、解釈しようという作業は、自身の作品へのリアリティを裏づけるものであり、「建築とは?」「住まうとは?」といった根源的な問題を解き明かそうという自己対話の軌跡です。巻頭に新たな書き下ろしを加え、氏の建築思想の集大成ともいえる一冊となっています。

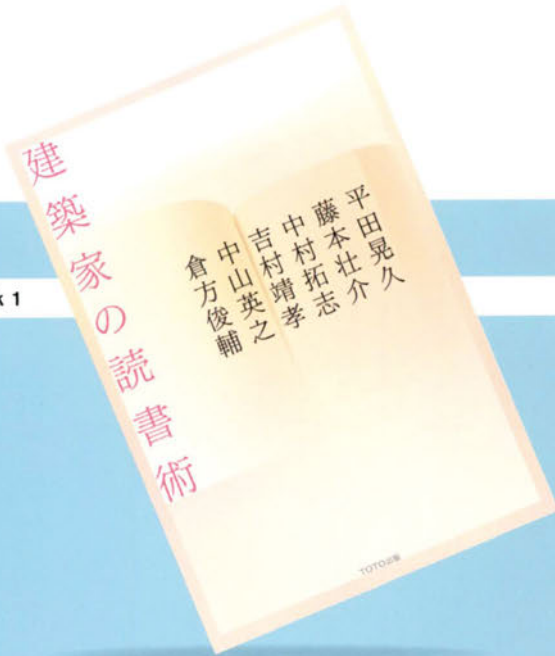
- 著者/坂本一成
- 定価/2,940円(2,800円+税)
- 体裁/菊判 ハードカバー
- 320ページ
- 発売日/2011年1月20日予定



場の変様4 GALLERY・MA 2006-2010

TOTOギャラリー・間の活動記録集第4弾です。安藤忠雄展、アトリエ・ワン展、クラインダイサム・アーキテクツ展、グレン・マーカット展、ステープン・ホール展など、2006年から2010年までの5年間に開催した国内外の作家による22の展覧会を紹介。出展者自身の会場構成による展覧会は、その思想を建築家自らの表現として実現させた作品であり、それらを記録した本書は彼らによるもうひとつの作品集ともいえます。作家ごとの個性が空間に現れた刺激的な一冊です。

- 企画 編集/TOTOギャラリー 間
- 定価/2,100円(2,000円+税)
- 体裁/280×220mm、ソフトカバー 84ページ



建築家の読書術

TOTO出版20周年を記念して2010年1月26日～2月6日に開催された30代建築家+建築史家による連続レクチャーの講演録。「20冊の本を選び、その本について語る」という企画に、平田晃久氏・藤本壮介氏・中村拓志氏・吉村靖孝氏・中山英之氏の5人の建築家が果敢にチャレンジしました。選ばれた計100冊の本に建築専門書はむしろ少なく、哲学・思想書、物理・生物学書、文学小説から漫画まで、あらゆるジャンルの本が含まれています。どの本もたいへん魅力的に語られ、「読んでみたい」という気

にさせるだけでなく、20冊の本で編成されたストーリーによって、各自の建築観や追求している新しい建築の可能性が、自作を語る以上に雄弁に語られます。建築史家の倉方俊輔氏による総括では、本を語ることで見えてきた1970年代前半生まれの5人に共通する同時代性や、本と建築に共通する特性が語られます。読書と建築の魅力をあらためて引き出す一冊です。



プレゼント!

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントします。

- 著者/平田晃久 藤本壮介 中村拓志 吉村靖孝 中山英之 倉方俊輔
- 定価/1,680円(1,600円+税)
- 体裁/A5判変型ソフトカバー 320ページ

▶ www.toto.co.jp/publishing

セラトレーディング	Bookshop TOTO	TOTO出版
<ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階 地下1階 ●電話/03(3796)6151 ●ファクス/03(3402)7185 ●営業時間/10:00～18:00 ●定休日/日曜日 祝日 夏期休暇 年末年始 	<ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)1525 ●定休日/日曜日 月曜日 祝日 「TOTOギャラリー間」休館中の土曜日 夏期休暇 年末年始 	<ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)7138 ●ファクス/03(3402)7187 ●全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。



次号『TOTO通信』は2011年4月上旬発行の予定です。

アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線 半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

あしたも、ちがう「まいにち」に。

TOTO

家電、 自動車。 つぎは、 水まわり。

エコ家電、エコカーの時代に、「水まわり機器」にできること。

TOTOは節水技術をさらに進め、2017年までに使用時のCO₂を50%削減します。

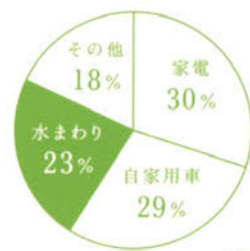
まずは、グラフをご覧ください。トイレを流す、お風呂を入れる、洗い物をする…

誰もがまいにち必ず使う「水まわり」が出すCO₂は、家庭からの排出量のなんと約1/4。

じつは、水の浄化や、下水処理、給湯などに多くのエネルギーを消費するため、水を使うことがCO₂排出の大きな原因になっているのです。TOTOは、温暖化対策で他業界の取り組みに肩を並べるべく、TOTO GREEN CHALLENGEを進めています。

節水技術のさらなる進化により、2017年までに水まわり主力商品の使用時CO₂を50%削減。

その挑戦は、超節水トイレ「GREEN MAX 4.8」から始まっています。



※2 <家庭からのCO₂排出量>

水まわりから、CO₂削減へ。



GREEN MAX 4.8
超節水トイレラインナップ

業界トップクラスの節水、4.8L洗浄。従来型のトイレ(13L)の約1/3の水量で快適洗浄を実現。(全7機種)

※1:1990年度比 ※2:[出典] [抜]国立環境研究所「温室効果ガスインベントリオフィス」日本の温室効果ガス排出量データ(1990~2007年度)確定値」と環境省「2007年度温室効果ガス排出量」をもとに算出



お問い合わせは、
TOTOお客様相談室まで **0120-03-1010** 受付時間:9:00~17:00
(夏期休暇 年末年始を除く)

www.toto.co.jp

**TOTO
GREEN
CHALLENGE**



この情報誌には植物性・森林認証材などの原材料と
する環境に配慮した用紙、なすびに印刷インキ工
業協会認定の植物由来インキを主に使用しています。

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp)をご覧ください。